女品

356
21

356-21

戰

報

大正
3. 12. 1
內交

はしがき

人生十年一昔と云ふが、旅順の沖に潮を浴びてより、回顧すれば早や一昔の星霜を經過した。當時自分と共に、隊を同じふし、艇を駢べて、時に飛彈を潛り、時に怒濤を衝きたる艇長は、司令兼第四十三號艇長海軍少佐大瀧道助、第四十二號艇長海軍大尉中堀彦吉、及び第四十號艇長海軍大尉中原彌平の三君であつた。然るに、中堀大尉は敵艦「セワストポリー」襲擊の際、不幸敵彈に碎かれて、千歲不滅の勇名を旅順の海に留め。中原大尉は戰後少尉候補生練習艦「松島」に分隊長として、明治四十一年三月臺灣澎湖島に在泊中、同艦火藥庫爆發の變

に斃れて、忠魂空しく南溟の蒼波に消へ。大瀧中佐(戰後進級)亦第十二驅逐隊司令在職中、明治四十四年十一月乘艦春雨の遭難に殉じて、英靈永へに志洲的矢沖の濁浪に葬むられ。今日尙ほ餘生を偸めるものは唯自分一人である。四人の艇長中、三人までも其職に殉じて、水漬く屍となりしを思へば、海軍々人の運命も洵に儚なきものである。加之、當時我等の乘艇として、船體の彈痕に纔に過去の戰歷を物語りし各艇も、生者必滅の理に洩れず、前年旣に廢艇と爲つて艦籍を除かれ、第十艇隊の名は永久に帝國海軍より消滅した。

爰に戰後十周年を紀とし、一は以て亡き戰友の靈魂を

弔せんが爲め、一は以て第十艇隊の戰歷を傳へんが爲め、愚劣なる舊稿を綴つて梓に上ぼし、聊か生殘者の義務を果さんと欲するのである。

大正三年十月

生殘の艇長　識

本書五個條

一本書題して戰影と云ふ。意は戰爭の實體にあらずして寫影と云ふに在る。乃ち戰爭の表面觀にあらずして裏面觀である。客觀察にあらずして主觀察である。外顯記にあらずして內看記である。公戰史にあらずして私戰史である。一層俱體的に述ぶれば、日露戰爭中、海戰第一期作戰（主として旅順方面の對敵行動）時に於ける自個中心の戰爭私記である。

二本書の大部分は戰爭直後、卽ち明治三十九年四十年頃、自分が尙ほ大尉時代の執筆に係るものである。從ふて之を今日より觀れば、稺氣寧ろ笑ふべく、野卑自ら恥づべきもの鮮なからず、或は識者の謗を受け、士君子の顰を買ふことなきを保せない。併しながら當時戰爭の印象尙ほ心に深かゝりしと、青年の血氣尙ほ胸に熾なりしとは、事の

實像を直寫したるものあるべきを思ひ、其の甚しきもの〻外は、特に刪除改訂を加へざることゝした。敢て讀者の諒を望む。

三 本書執筆當初の目的は、一般國民に對して海戰の狀況を紹介し、兼ねて軍事觀念の普及に利せんと欲するに在つた。之を以て叙事は力めて通俗的に述べ、話材は成るべく有趣味のものを擇ばんと試みた。然かも軍人の筆いぢりは、商人の畠作りよりも尙ほ覺束なく、辭句は生硬、想察は淺薄、其の述べて盡さず、擇んで當らざるもの、甚だ鮮しと仕ない。殊に我が國の國情と、習俗と、規則とは、露國軍人の筆に成れる彼の「ラスプラダ」や「ノヴィック」の如く、忌憚なき自由の評論と、腹藏なき赤裸の記述とを許さない。其の讀者に負くもの多きを謝す。

四 本書は前述の如く自己中心の戰爭私記である。從ふて記事の重きを自分の奉職したる隊に置きたるは、固に已むを得ざる次第である。此の點に於て本書は亦水雷艇戰記とも稱し得べきであらう。元來

水雷艇と軍艦とは、其の任務の性質に於て、其の生活の狀態に於て、其の間に大なる相違がある。若し夫れ、戰時に於ける比較的放漫なる水雷艇生活を以て、平時に於ける規律嚴正なる海軍一般を推すものあらば、是れ恰も、南人の葛を見て北人之を憫むの類にして、誤まれるの甚しきものである。殊に戰後既に十年、我が海軍は其の外形に於ても、其の內實に於ても、共に著しき整備發達を遂げて居ることを忘れてはならぬ。

五 日露戰爭は慥かに有史以來に於ける世界大戰の一に屬すべきものである。奉天の會戰は、其の兵數の多くして戰線の長き點に於て、前代未聞と稱せられた。日本海々戰は、其の艦隊の大にして兵器の精なる點に於て、振古未有と稱せられた。併しながら之を今日現に戰はれつゝある歐洲大戰に比すれば、其の兵數の多寡、其の戰線の長短、其の兵器の精粗に於て、恰かも月前の星の如き觀がある。日露戰爭

本書五個條

には飛行機もなかつた。航空船もなかつた。潛水艇も未だ實戰に參加しなかつた。軍艦の最大備砲も僅に十二吋に過ぎなかつた。無線電信の有效距離も精々四五百海里を越へなかつた。斯くの如く最近僅に十年間に於ける兵器の進歩は、誠に驚くべきものがあるが、戰爭の原理に至りては、今も昔も絶體に變化がない。曰く、

兵力の强い者が必ず勝つ！。日本はどこ迄も强くなければならぬ!!。

目次

一　雨か風か……一
二　生別會……三
三　出征……四三
四　對州……五四
五　開戰……六五
六　夜廻り……七八
七　悲劇……九〇
八　前進……一〇五
九　閉塞隊（上）……一二三
一〇　閉塞隊（下）……一三七
一一　大厄日（上）……一五四

一二　大厄日：(下)……一六六
一三　封鎖宣言……一八〇
一四　敵の勢揃へ……一八八
一五　封鎖勤務……二〇七
一六　黄海の海戰：(上)……二二八
一七　黄海の海戰：(下)……二四五
一八　臨檢搜索：(上)……二五八
一九　臨檢搜索：(下)……二六八
二〇　休養：(上)……二八〇
二一　休養：(下)……三〇一
二二　血の價：(一)……三二一
二三　血の價：(二)……三四五
二四　血の價：(三)……三六七

二五　棹尾の一擊……三九三
此一戰琵琶歌……四一七

挿畫目次

著者の乘艇(コロタイプ)
亡き戰友(コロタイプ)
激戰(三色版)
開戰當時日露制海權分布圖(石版)
日露艦隊勢力比較圖(石版)
驅逐隊の激戰(寫眞版)
「ペトロパウロスク」の爆沈(寫眞版)
底の藻屑(露國戰艦「ペトロパウロスク」)(寫眞版)
暮色悽愴(三色版)
閉塞船沈沒位置圖(石版)
第三回旅順口閉塞(寫眞版)

旅順港口の閉塞船(寫眞版)
大犧牲(寫眞版)
驅逐艦の突進(寫眞版)
激浪。狂瀾(寫眞版)
機雷沈置艇の旗艦集合(寫眞版)
旅順近海に於て我が艦隊の發見したる浮流水雷概位概數並に我が艦艇罹災位置(石版)
露式機械水雷。機械水雷の爆發(寫眞版)
午後一時十五分第一次戰鬪開始時に於ける彼我の對勢(石版)
戰機熟す(寫眞版)
午後五時三十分第二次戰鬪開始時に於ける彼我の對勢(石版)
三笠大檣の彈孔。其の應急處置(寫眞版)
午後八時四十五分頃終戰時に於ける彼我の對勢(石版)

黃海の戰(午後八時過)(寫眞版)
ジャンク捕獲(寫眞版)
怒濤澎湃(三色版)
突擊(寫眞版)
夢の跡(寫眞版)
一片の煙(寫眞版)
攻圍軍の殊勳者(二十八拇榴彈砲。同砲彈)(寫眞版)
海軍陸戰重砲隊の奮鬪(寫眞版)
奇想落天外(追擊砲。山上の魚雷)(寫眞版)
空中征服者の祖先(繫留氣球)(寫眞版)
大連灣埠頭(寫眞版)
勝利の價(寫眞版)
間接射擊(水柱奔騰。猛火炎々)(寫眞版)

目次

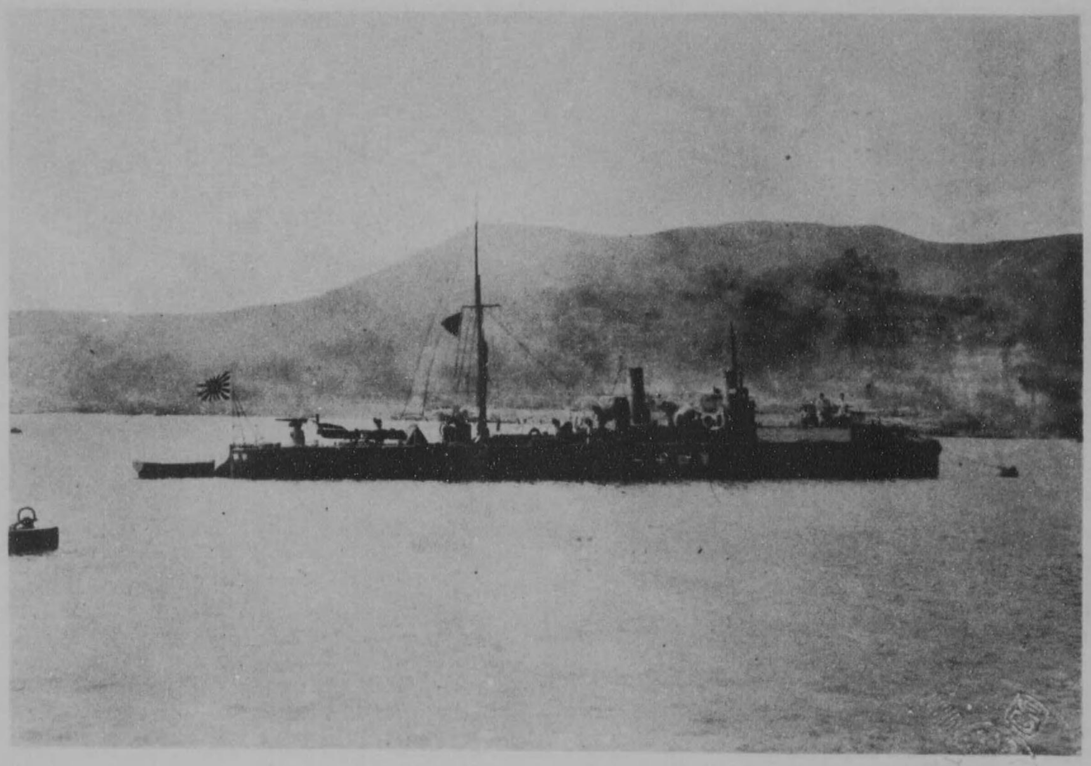
旅順要塞攻圍進捗圖(石版)
露艦の殘骸(寫眞版)
魚形水雷及發射管。魚雷發射(寫眞版)
日本海大海戰(寫眞版)
感狀二通

裝幀　杉浦非水

艦隊の進擊
艦雷水戰　一　十回第聯隊十第

第十號艦橋四十一糎水雷艇

蒼鷹の愛撫



第十艇隊司令兼
第四十三號水雷艇長
海軍少佐　大瀧道助君

第十艇隊
第四十二號水雷艇長
海軍大尉　中堀彦吉君

第十艇隊
第四十號水雷艇長
海軍大尉　中原彌平君

海軍少將 大藤巖助 殆

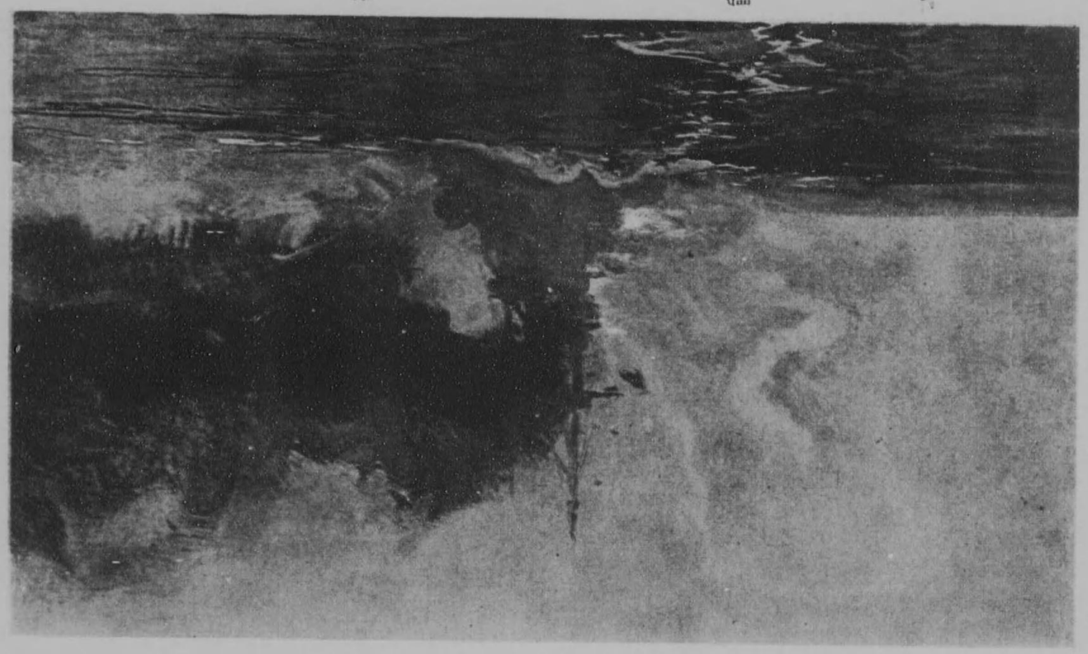
第四十三艦水雷隊長
第十隊總司令兼

海軍大佐 中瀨巖平 殆

第四十艦水雷隊長
第十隊

海軍大佐 中瀨斐吉 殆

第四十二艦水雷隊長
第十隊



戦影

一　雨か風か

一海軍中佐著

滿洲第三撤兵期

明治三十六年十月八日は、是れ露國が世界に向つて聲明したる滿洲第三撤兵期である。自分が營口冬籠り準備の爲め、北清より佐世保へ歸港したのは、同年の九月中旬であつた。當時滿洲問題に關する日露の交渉は漸く蔗境に入り、新聞などでは隨分激烈な論調を以て、政府の

一　雨か風か

對露同志會七博士論文

優柔不斷を憤慨、慢罵して居る。啻に新聞のみならず、民間有志の間には對露同志會の組織となり、學者仲間では大學七博士の論文となり、全國の輿論は次第に主戰論に傾いて來た。然も帝國の提案に對する露國の對案なるものは、曰く『滿洲は此方のもの朝鮮は其方の自由にさせぬ』と、恰も我が大日本帝國の存在を忘れたかの如き挨拶であつた。

露國の野心

此の時東洋に於ける露國の軍備は、之を我が帝國の其れに比すれば、海陸共に稍や劣つて居たのである。武力の後援なき外交談判は喜劇に類するとかやで、十年以前三國同盟で味を占めた彼は、滿洲事件が發生すると同時に、先づ第一に其の東洋艦隊の增勢に力めた。彼は、我が帝國が容易に劍を拔いて立たぬ事を看破して居る。故に成べく交渉談判に時日を遷延して充分に其の軍備を修め、然る後恫喝を以て己が搏噬の欲を滿たさんと考へたのである。

やがて約束の十月八日は來た。彼は撤兵を實行しないのみならず、

口と腹

時局の一轉進

大連灣に砲臺を築く、旅順の要塞を修造する、本國からは益々陸兵を增派する、精鋭なる軍艦は悉く東洋に廻派するなど、所謂陽に平和を唱道して、陰に軍備の增大に力めて居る。乃ち片手で握手しながら、片手を後に廻して、潛かに銃に裝塡しつゝあるものである。彼れ已に銃に裝塡す、我れ亦佩刀の柄に手を掛ざるを得ない。

是に於てか、時局の紛擾と列國の誤解とを避くる爲め、久しく北海方面に遊弋し居たる帝國常備艦隊は、今や西海の關鑰たる佐世保軍港に集中せしめられた。吾々海軍々人より見たる時局は、茲に始めて一轉進を來した。斯くて佐世保に集合したる我が艦隊は、其の後、大砲射擊に、水雷發射に、或は警戒航海に、或は艦隊運動に、諸種の訓練、演習の爲め、日も是れ給らざるの有樣である。各軍港に於て修理を終へたる軍艦は、續々佐世保に集まつて來る。流石の軍港も今は海の狹きと、設備の小なるを感ずる程となつた。

營口の冬營

斯かる間に、自分の艦は既に冬營の諸準備を完整し、不日愈々營口に向ひ出發せねばならぬことゝなつた。抑も營口の冬營とは、遼河河畔に泥船渠を掘つて其中に潜り込み、冬季の間、自國居留民の保護に任ずるもので、日、英、米、露等の軍艦は毎年一隻づゝ、此處に冬籠りする慣例となつて居た。然れば一度遼河を遡つて冬營に就いたが最後、戰爭が始まらうが、どうしようが、來春の解氷期までは、こゝ一寸も動くことは出來ないのである。然る處遼河は十月の二十日過ぎには、河水凍結して出入不可能となるので、若し冬營をするとすれば、是非其迄に行かねばならぬ。明日にも戰爭がオッ始まらうかと云ふ、此の形勢逼迫の場合に際し、態々敵の領分たる營口へ冬籠りに行くのは、恰も飛んで火に入る夏の蟲同樣で、我から進んで敵の餌食になりに行く樣なものである。あまり有難い役目ではない。九十人や百人の吾人乘組員が、如何に日本魂で力んだ處で、要するに犬死に過ぎない。今に冬營取止め

遼河結氷期

飛んで火に入る夏の蟲

命拾ひ

乘員斬り死の覺悟

の命令が來るか〳〵と待つて居つたが一向に來ない。

日は次第に進んで早や十月の中旬となり、遼河結氷の期は既に一週間の後に迫つた。而かも其筋よりは未だ何等の命令も來ない。左れば云つて「時節柄物騷に付き此の際營口の冬營取り止め相成度」と、此方から願ひ出る譯にも行かず、正かの時には艦を爆破し總員斬り死の覺悟で、愈々明後日は營口に向つて、佐世保を出發することに決定した。談判一たび破裂せば、どうせ命はないものぢや、此の世の思ひ出に、今夜は大々的活動をやらうではないかなどと、士官室會議の眞最中、暗號電報で「其の艦の出港を延期すべし」と云ふ樣な命令が來た。滿と引き絞りし弓弦の俄に切れたるが如く、今となりては一同頗る氣合拔けがして、

『何だ！つまらない。』

『それぢや命拾ひの蘇生會をやろや?!』

一　雨か風か

露艦マンヂユール

恐らく大なる悲劇が

一憂去つて又一憂

『贊成！』『贊成！』

斯くて營口の冬營は終に取り止めとなつたが、若し彼の時冬營をやつて居たなら、我々の運命は果してどうなつて居たであらう？。彼の上海に於て軍艦旗を卸し、武裝を解除し、以て軍艦の主權を拋棄して、外國官憲の管理に委したる、露國軍艦「マンヂユール」の如き行爲は、迚も日本の軍人としては爲すに忍びない。恐らく日露戰爭には、一つの大なる悲劇が附け加へられたであらう。

此の時自分は、成り立てホヤ〳〵の大尉であつた。自分の乘艦は排水量僅に六百噸に過ぎざる蕞薭たる一小砲艦であつた。戰時編制に依ると、此の軍艦は、何でも佐世保の灣口警備とかの任務である。一憂去つて又一憂、幸に營口の犬死を免れたかと思へば、今度は灣口の番人ぢや。之では戰爭が始まつたつて仕方がない。雄風堂々たる戰艦、巡洋艦や、輕快洒々たる驅逐艦、水雷艇が訓練演習の爲、毎日出入するの

愚痴と不平

大擧上陸

を眺めては、日夜健羨の情に堪へなかつた。千歳一遇の此好機に際し、こんな腐り船で佐世保の番人なぞ、やらされて溜るものか、そんな事をする爲に、態々〳〵海軍なんかに入りやしないんだ。愈々開戰となつたら、

甲『オレは泳いでゞも旅順へ行く。』

乙『イヤ、オレは一度戰爭さへすれば、後で懲役へ行つても構はないから、脫走して戰鬪艦の底へなりと潛んで行く。』

丙『馬鹿云へ！。人は宜しく天命に從ふべしだ、最初の一戰で士官以上少くも半分は屹度死傷するに違ひない。さうなると、オレ達でも戰鬪艦とは行かなくとも、一等巡洋艦の副長位にはなれるさ。』

丁『人間が半分死にや、船も半分沈んで仕舞ふ譯ぢやないか。そんな呑氣なことが言つて居れるかい。』

などゝ、下らぬ不平やら愚痴やらは、毎夜晩飯の卓を賑したものであつたが、不平の結果は、いつも大擧上陸となるので、懷は時局と共に常

一　雨か風か

東郷大將起つ

に頗る切迫して居た。

此の頃又誰言ふとなく、東郷出でざる間は戰爭は起らずとの噂があつた。火の無き處煙を見ず、其の後間もなく、東郷海軍中將は舞鶴鎮守府司令長官より起つて、常備艦隊司令長官となられた。其の參謀長は帝國海軍に其の人ありと知られたる島村海軍大佐(速雄)である。次で常備艦隊は解隊せられ、帝國艦艇の精鋭をすぐつて、新に聯合艦隊即ち出征艦隊が編成せられた。之と同時に、海軍省や、軍令部などの、所謂赤煉瓦屋敷に居る名士達が、續々艦長となつて出て來るので、上層の雲脚漸く急なるを推想せしめた。是が吾々より見たる時局に對する第二轉進であつた。併し自分は相變らず老朽砲艦の乘組である。戰爭が始まつたつて何になるものか、灣口警備で、風を引く位が關の山ちやと思うと、情なくつて遣る瀬がなかつた。

出征艦隊の編制

時局の第二轉進

明治三十六年も早や暮となつた。日露の交渉は、まだ煮へ切らない。

柱一本の曲りも釘一本の弛みも

出征準備

併し裏面の暗流は日に益々其の速度を增して居る。東郷司令長官より出づる日々の命令訓令は、悉く戰備に關したものである。各艦艇は完全の上にも尙ほ完全を期して居る。柱一本の曲りも、釘一本の弛みも、時には全艦の戰鬪力に影響することがある。海軍工廠は徹夜で工事を急いでをる。煙突の煙と鐵槌の響きとは、もう〳〵、かん〳〵、晝夜絶へ間がない。艦隊は遂に出征準備に着手した。一方には艦内に在る小端舟を始めとし、簞笥の引出し、木製扉、食卓乃至カーテンに至るまで、苟も敵彈を受けて火災を起す虞あるもの、並に破片となつて飛散する物をば悉く陸揚げする。他方には彈藥、水雷は素より、石炭、糧食其他各種の兵器、軍需品をば艦内に滿載する。軍港の阜頭場は、之に從事する幾百の汽艇、端舟の集散輻湊に依つて、雜沓混亂を極めて居る。陸上には大小の砲彈や、罐詰の箱などが、長城の如く積み重ねてある。軍艦錨地の彼方に碇泊せる内外幾多の商船より積み卸す英炭は、倉庫

佐世保は既に戰爭開始

に溢れて、海岸附近到る處に黑き長堤が築かれてある。其の量實に幾百幾十萬噸なるを知らない。暗黑の炭塵は空を掩うて、佐世保では已に戰爭が開始せられて居る。

海兵團を右に、鎭守府の松林を左に見て、軍港の正門を出づれば、左に水交社、右に下士卒集會所（是は戰後に出來たのだ）がある。水流餘り淸からざる佐世保河に架した海軍橋を渡れば、こゝ佐世保の市街である。

時局と佐世保

二十年以前までは、漁家點々、人煙いとゞ稀なりし一寒村より、一躍して今日の佐世保市に出世したる新開地は、矢張り世間並の新開地たる資格を具備して、人氣はあまり宜しくない。殊に日露の風雲漸く急ならんとするに至つては、御用商人、職工、人夫其他浮浪の男女が、相次で此處に入り込んだ。當時陸軍に於ける宇品と、海軍に於ける佐世保と云へば、金の湧く泉でも出來たかの如く、一攫千金の奇利を博せんとする天下の有象無象が、我も〳〵と四方から詰め込んだものである。五十の

活氣よりも寧ろ殺氣

轉任

甘くやつたなア

老婆がおしろいを塗り、口紅を付けて乘り込んだ一事を以ても、萬事が察せらるゝであらう。佐世保の天地は忽ち是等、餓虎貪狼の晝夜橫行飛躍する一大修羅場と變じた。活氣と云ふよりも寧ろ殺氣である。

爾來、時局の雲行は、時に急なるが如く、時に緩なるが如く、暗雲漠々の裡に明治三十七年の春を迎へた。昨年の暮、自分はいやな砲艦から、某水雷艇に轉乘を命ぜられた。辭令を頂戴した時には、嬉しくて〳〵、天に向ひ三拜九拜した。最早何時開戰になるとも、旅順へ泳いで行く心配も、戰鬪艦の底へ潜んで行く苦勞もなくなつたと同時に、後に殘る人々に對しては誠に同情の念に堪へなかつた。

甲『甘くやつたなア。』

乙『山の襲擊振りがよかつたと見えるね。』

丙『早く行つて死んで呉れ！ お後が支へて居るんだから……但し船は沈めるべからずだぞ。』

一　雨か風か

『馬鹿言へ！何とでも猜め〳〵。』

かゝる間に我が聯合艦隊は、已に悉く出征の準備を完成した。各艦艇は其外舷を、濃鼠の戰鬪色に塗り換へた。仁川に在る千代田の外、海外警備の我が軍艦は悉く内地に引揚げた。今は唯發進の電命を待つばかりである。若し夫れ佐世保港頭に立つて沖合を眺めんか、堅艦快艇、舳艫を連ねて、檣桁林の如く、煤煙天を蔽ふ。偉觀壯觀自ら人

今は唯待つ發進の命令

露國の戰備

意を强うせしむるものがある。

帝國の戰備成ると同時に、露國の戰備も餘程整備したであらう。殊に其の艦隊の如きは、今や我が聯合艦隊と殆ど軒輊する所なきのみならず、尙ほ來航の途にある軍艦も尠くない。若し是等の軍艦が悉く來着した曉には、彼我の勢力、相反轉するかも知れない。即ち開戰一日後るれば彼に一日の利あつて、我に一日の損があるのである。一月七日は我が第二提案に對する露國回答の來るべき日である。此の回

雨か風か

答こそ、雨か？風か？和戰何れかを決するものであるとの噂が高かつた。やがて露國の回答は來た。相變らず我が帝國を馬鹿にした言前である。國民の血は今や熱して殆ど沸騰點に達した。露擊つべしの聲は翕然として全國に鳴り響いた。走童、厮夫の徒尙ほ腕を扼して、露國の暴狀を憤慨して居る。○○の非戰論者に對しては、檜斬るべし、倫斬るべし、近亦屠るべし、と絕叫する新聞がある。歐米各國亦我に同情を表すると共に、戰爭の到底避くべからざるを唱へて居る。然も我が政府は隱忍尙ほ垢を含んで、再考を露國に促した。

檜斬るべし

時局の遷延に待ちあぐんだ國民は、外交に對する不滿の矢をば、今や我が海軍に向けて來た。或る者は海軍を捉へて、無能と詈り、意氣地無しと誘つて居る。或る者は艦隊に向つて、斷然旅順口へ進發しろと反逆を勸めて居る。海軍こそ飛んだ迷惑である。吾々は戰爭を希望することと、一般國民よりは一層强烈であつた。當時二人寄れば談は必ず

飛んだ迷惑

時局問題の上に馳せた。血が若くて責任が無い丈、隨分猛烈な新聞直傳の激論を吐いたものである。

露國東方政策の曲直や、我が對滿韓策の巧拙に關しては世上既に定論がある。併し往事追ふべからず、事茲に至りては唯戰あるのみである。今日の事尙ほ忍ぶべくんば、天下何事か忍ぶべからざるものあらんやだ。此の膝一たび屈すれば復た伸ぶべからず。

此膝一たび屈すれば

と慷慨する者もある。

十年この方、國民の血を搾り、膏を絞りて、擴張したる軍備は何の爲めである。十三師團の陸軍、二十五萬噸の艦隊、今日用ゐずして何れの日に用ゐんとするのである。臥薪嘗膽の聲尙ほ耳に在り、日本帝國今一人の范蠡なきか。

臥薪嘗膽の聲尙ほ耳にあり

と力むものもある。

此の辱にして忍ばざるべからずんば、最早や日本は日本の日本にあ

らず。我は寧ろ東海に赴いて死なんのみ、何爲ぞ碌々として活を小朝廷に求めんや。

胡詮もどき

などゝ、柄にもなく胡詮もどきに悲憤するものもあつた。

回向院の相撲だつて本場所となりや、化粧立の四五回と、待つたの十何遍もやるじやないか。況して國家の存亡を賭する戰爭をば、犬の出合ひ見た樣に、さう容易く始められて溜るものか。

などゝ、偶々老成振つた說でも吐こうものなら、忽ち非國民とか、露探とか宣告されて、拳固の二つ三つは頂戴したものである。

拳固の御見舞

佐世保山手の蕭洒たる下宿の二階に、今しも集まれる三四名の若き海軍士官がある。目刺と漬物とを下物に一杯を傾けつゝ、談はいつしか、相變らずの時局問題や戰爭論に移つて、各々勝手氣儘な怪氣燄を吐いて居る。下宿の娘さんがお銚子の代りを持つて二階段を上りかけたが、あまり騷がしいので、喧嘩ではなからうかと、三段目程で立留つて

立ち聞き

戰術論

聞いて居る。

甲『貴樣達は唯無闇に戰爭々々つて、丸で小供が招魂祭の見世物でも見に行く樣に騷ぎ立てるが、扨て愈々國交斷絶して、サア聯合艦隊は直に出發して、敵艦隊を擊滅せよといふ命令が來たら、どうして戰爭をオッ始める積だ？』

乙『ナニ心配するな！。そこに至つちや、オレは三年も前からチャーンと計畫ありだ。一體日本の樣な島國が外國と戰爭するには。どうしても戰爭の皮切りは海軍でやらねばならん。海上に於ける我が優越權を占得するまでは、陸軍が幾らあせつたとて、一歩も敵地へ踏み出すことは出來ないんだ。併し大陸の敵に最後の止めを刺すのは陸軍の役目であるから、吾々は一日も早く東洋の海上權を占めて、一日も早く陸軍を滿洲の野に送らねばならない。そこで我が最少の犧牲を以て、敵に最大の損害を與へるといふ兵の上策を採つて、先

元就流の夜襲說

ホブソン式の閉塞說

づ戰鬪開始と同時に、驅逐艦、水雷艇の全部を旅順口に進めて、疾風迅雷的に夜襲を決行せしめるのだ。敵の戰艦の二三杯もやつつければ、一擧して海上權を獲得することが出來るのだたら、縱令ひ我が驅逐艦や水雷艇は全滅しても構はない。乃ちオレは元就流の夜襲法を主張するのだ。』

丙『成程夜襲も決して惡くはないが、オレは其よりも尙ほ一層奏效確實なるホブソン式の閉塞說を主唱する。乃ち敵の全艦隊を港の內へ封じ込んで、一切外へ出ることの出來ない樣にするのだ。それも夜中に薄つぺらな商船などを持つて行つたつて、到底成功の見込がない。そこで、オレの說は明方か、或は暮間に、敵艦隊が總て港內に在る時を撰んで、軍艦鎭遠を港口水道の眞ン中にぶち込んで爆沈するのだ。鎭遠なら元が老耄の分捕艦だから沈めたつて惜しくもなし、殊に其の二十四吋の甲鐵鈑は少々海岸砲臺や敵艦から擊たれたとて

遭遇戰や邀擊戰

平氣なもので、屹度安全に港口へ達するに違ひない。あいつを一艘、うまく沈めたら、旅順は丸で漏斗の尻に栓をした樣なもので、出ることも入ることも出來なくなる。オレは孫子の所謂戰はずして敵を屈するの策を採るのだ。』

丁『貴樣達は、夜襲とか、閉塞とか、丸で他人の寢首でも搔く樣な、意氣地のないことばかり考へて居るが、幾ら呑氣な露西亞人だつて、明日にも戰爭がオッ始まらうと云ふ今日、まさか安から閑と居眠りも仕て居まいだらうぢやないか、佐世保の口にだつて、既に昨年から每晩哨艇が出て居るぢやないか。さうこつちの注文通りには中々問屋で卸さんからね。オレはどうしても此の海戰は、洋中に於ける正々堂々の遭遇戰か、或は邀擊戰になるであらうと思ふね。併し彈藥、大砲の發達したる今日のことゝて、合戰は長くとも二時間とは續くまいが、此の二時間の間に、日露兩國の興廢が決するのだと思ふと、開闢以來

丁字戰法
乙字戰法

何千年とかの國家の運命も、何だかあつけないものだね。矢張り海戰はネルソン時代の樣に、舷々相接して襲擊隊が敵艦に突入する樣なのが戰ひらしくて面白いね。』

丙『何だ詰まらない！。貴樣の議論は薩張り結末がない。そこで貴樣の云ふ通り、若しも遭遇戰か邀擊戰となつたら、どういふ作戰を運らさうと云ふんだい？』

丁『そりやア貴樣！、所謂丁字戰法に依つて敵の先頭を壓擊しようと、又は乙字戰法に依つて敵の首尾を挾擊しようと、臨機の戰術を施すさ。若しオレを司令長官にして呉れたら、實地にやつて見せてやらア！』

甲『此奴め、人を馬鹿にして居やがる。貴樣が司令長官になれる樣なら、ペコだつて艇長位には成れらア、ハ、、、』

二階段の所で俄に可愛らしい笑聲がホ、、と聞へたので、折角の戰爭論も其の儘消へて仕舞つた。

『靜子さん！立聞なんか隨分お人が惡いですね。』

ペコとは水雷團に居る極めて鈍ろい、而も大食の黑犬のことである。幾ら食つても始終腹をペコ〳〵さして居るので、それでペコと命名されたのだそうである。折々下宿の臺所を荒すでお三君とは極めて仲が惡い奴ぢや。

ペコ先生

帝國政府から最後の修正案を露國に提示したのは、一月の十二日であつた。內地の新聞も今は稍や叫びくたびれたのか、時局の表面はこゝ暫し少康の狀を呈した。併し是れ、大風の前に於ける靜穩である。

佛の顏も二度三度

雪雨の前に於ける寂寞である。裏面の氣壓は益々降り、暗雲は愈々密である。佛の顏も二度三度、兎も三年嬲れば嚙み付とかや、露國の傍若無人の行動に、流石勘忍强き廟堂の意見も、今ぞ終に決する所があるらしい。南米の亞爾然丁共和國から購入したる一等巡洋艦「日進」、「春日」の兩艦は、既に其の製造地たる伊太利ゼノア港を發して回航の途

風既に樓に滿つ

に就いた。聯合艦隊と獨立して、舊式軍艦を以て別に、新に一艦隊が編成せられた。之が司令長官は片岡海軍中將である。自分の艇隊は此の艦隊に附屬せしめられた。聊か失意ではあるが致し方がない。

一月中旬の頃、片岡司令長官から電命があつた。曰く、戰鬪準備を完成して至急竹敷に回航すべしと。風既に樓に滿つ、山雨豈に來らずして止まんやだ。

一　雨か風か

二　生別會

旅順へでも浦鹽へでも

是でも花の海軍士官？

佐世保水雷團の麓なる池の如き狹き海面に、舳艫を交へて繫留せる大小數十隻の水雷艇がある。雪白の船體は既に戰鬪色なる鼠色に塗り換へられ、命令一たび降れば、旅順へでも、浦鹽へでも、突進突擊すべき一切の戰備が整へられて居る。今しも其の一隻から、盥舟に等しき小端舟が漕ぎ出された。士官が一人乘つて居る。シャツも着ず、カラーも掛けず、不恰好にヒン曲つた帽子は、徽章も金筋も眞ッ靑に錆て、坐ろに海上苦鬪の跡を留め、靴の代りに紺足袋に麻裏草履と云ふ、極めてバンカラな服裝である。是でも所謂花の海軍士官かと思はれる樣だが、腕には慥に二本の蛇の目筋が付いて居るので、纔に其の大尉たることが判る。幾歲月の間、潮風海陽に磨き上げたる顏面は、赤銅の光を帶て、薄い髭などは正面からは有無の程もわからない。隣の艇の十間も手前

當番の水兵

御出迎へ

一層猛烈

から蠻聲を張り上げて、『艇長居るか？』と呶鳴ると、獨りで頻りに手旗の稽古をして居た當番の水兵が、びつくりして、『居られます！』と答へながら、後甲板の方へ驅けて行き、通風筒の孔へ頭を衝き込んで何か報告した。

やがて甲板の穴の樣な處から、一人の若い士官がニヨコ〳〵と出て來た。腕の筋は一本半の中尉だが、羊羹色に灼けた上衣の肘は拔けて裏を食み出し、毛の切れたヅボンの兩膝には半月形の接布が當つて居る。而もそれが紺のメルトン地に、黑の羅紗切と云ふ珍妙な配合なので、如何に御當人の手細工とは云ひながら、其の不細工さ加減に呆れる。紺足袋の指は破れ、幾月挾刀を入れぬ、毒々しき爪が穴から窺つて居る。先の二本筋よりは一層猛烈ないでたちぢや。

ボートが舷門へ着くと、又一人の二本筋の士官が上甲板へ驅け出て來た。之は先の二人とは反對に、カラもカフスも雪を欺き、ヅボンの筋

上陸支度

泥中の白蓮

洋服の同情

は折目正しく、一枚革の深ゴム靴には塵も止めず光輝を放つて居る。多分上陸の仕度であらう。

凡そ海軍に於ては水雷艇乘と軍艦の甲板士官とは、服裝の汚いものと相場がきまつて居る。素より水雷艇乘だつて人間である限り、求めて穢い服裝を好む譯ではない。誰しも始めて水雷艇に乘つた時には、仲間の不潔なるを見て、將校の體面に關するなどゝ大に憤慨し、獨り泥中の白蓮を以て任じつゝ、力めて相當の體裁を繕ふのであるが、何分狹い艇内のことゝて、ヅボンに油が浸み、上着に塗具が付き、航海すれば潮水を浴びる、煤塵が掛かる、新しい服でも一月か二月か經てば、忽ち臺なしになつて仕舞ふ。去ればとて貧乏士官の身には、さう〳〵新しき着物を造る事も出來ず、米屋の小僧自ら糠團子になるの類で、何時の間にか乞食の樣な服裝になつて仕舞うのである。洋服屋の番頭同情して曰く『驅逐艦や水雷艇の方は、服裝手當でもなけりや實際御氣の毒

甲板士官

頗のだるくなる程

ですなア』と、若しそうなれば水雷艇乘り萬歲、洋服屋萬歲である。一つ議會へ建議案でも出して貰はうか。

又甲板士官とは軍艦の警視總監、掃除監督、兼女中頭と云ふ格式で、副長を助けて艦内の整頓、器具の手入より、兵員の取締に至るまで、專ら艦の警察保安を司る役目である。朝は兵隊より先に起き、夜は兵隊より後れて寢、味噌醬油庫より兵員の便所に至るまで、終日艦の内外を巡視檢分して、『ソレ、こゝに水が溜つて居る！』、『そこの隅にゴミが殘つて居る！』、『窓の金具の磨き方が惡い！』、『こんな處へ靴をやりッぱなして置くのは誰だ？罰金箱へ拋り込め！』、『なぜそんな處へゴロ〳〵寢て居るのだ！』と、頗のだるくなる程小言を言つて廻る。一方には『甲板士官！今朝洗濯して置いた襦袢が見えなくなりました』と訴へて來る水兵があるかと思へば、士官室からは『今度のボーイは氣がきかないから取り代へて呉れろ』と請求して來る。副長からは『味

吐哺握髮

ホヤ〳〵の奥さんより

噌庫の整頓が惡い、ハンモックの收め方が穢い』と叱られる。軍艦で甲板士官位忙しくて而かも割りの惡い役は外にない。周公は一食に三たび哺を吐いて客を迎へたと云ふが、甲板士官は一度の食事中に何遍席を起つか判らない。こんな有樣であるから、到底服裝などを整へて、士官樣然と澄まして居る譯には行かない。

軍艦見物に行つた人は、穢い帽子や服を着けた若い士官が、眼をぎろつかしながら、始終下甲板あたりを驅け廻つて居るのを見るであらう。これが卽ち甲板士官である。そこで此の甲板士官なるものは、必ず中、少尉のやる仕事で、大概の海軍士官は少くとも一度は之をこいで來るのであるから、箒の用い方より雜巾の掛け方に至るまで、女學校出のホヤホヤの奥さんや、山出しのお三どんよりは餘程研究が積んで居る。

海軍出身志願の令嬢達は必ず油斷あるべからずだ。ハハ、、、

＊　＊　＊　＊　＊

繩梯子の大木戸

犬の出合よりも

相談

舷側にぶら下げられたる僅か二三段の繩梯子、之でも水雷艇の爲めには、閑人入るを許さゞる石門、鐵扉の大木戸である。先きの來訪の士官は長い股をば無遠慮に廣げて、二段越しに上甲板へ飛び上るや、出迎の士官と、

『ヤー！』

『ヨー！』

恰も擊劍の掛聲の樣だが、之で訪問の挨拶が濟むとは、犬の出合ひよりも尙ほ簡單ぢや。

『馬鹿にめかし込んで居るじやないか、もう見に歸るのかい？。一寸相談があるからまア待てよ！』

『貴樣の相談なら大概きまつて居る、又山のぼりの御附合だらう？』

『そう！其の通り!! 女房が出來ると大變御察しが良くなるものだね。ハ、、、』

三人の士官は快活に笑ひながら、上甲板の穴の中へ其の姿をかくした。

唯一の城廓

廣さ僅に六疊敷の士官室、是ぞ水雷艇乘りの爲めには、食堂ともなり、寢室ともなり、事務室ともなり、又休憩室ともなる、唯一の城廓である。男孀に蛆がわくとやらで、水雷艇の士官室は隨分亂雜なものである。帽子掛には汚れた襦袢がぶら下つて居る。甲板の隅には泥塗れの靴が轉がつて居る。齒磨楊枝と靴刷毛とが雜居したり、拭巾と雜巾との混用などは左程珍しくない。

蠶蛆臭を知らず

初めて軍艦などから轉乘して來た當分は、不潔で狹苦しくて、實に不愉快で堪へられん樣であるが、糞蛆臭を知らず蓼蟲辛を忘るとかで、次第に馴るに從ひ何ともなくなつて來る。習慣と云ふものは誠に恐ろしいものである。今しも三人の士官は、破れ靴や麻裏草履の凌辱と、鐵煙管の亂打とに逢ふて、殆ど全く其の稜線を摩損したる穢い箱火鉢を圍んで、他愛もない戲談に耽つて居る。水

掃溜の鶴

雷艇には軍艦の如く暖房の設備がないので、寒中に限り特に火鉢が許されて居るのである。夫も炭量にさまざまがあるので、夜遲くまで酒の酣などをやつて居ると、二月の半に早や炭切れの寒さに泣くやうなことがある。机の上には書きかけの書類や讀みさしの雜誌やが、雜然として散らばつて居る。其の間に藥莢の打殼に挿けられたる一枝の白梅が、掃き溜の鶴然として獨り馥郁の清香を放つて居る。御客樣のH大尉が有か無きかの薄い髭をひねくりながら、

『とう〳〵物になつたようだね、併し第三艦隊とは聊か物足らないね。……』

慾を云へば際限ない

美服のN艇長が分別顏に、

『慾を云へば際限がないさ、隣の隊の樣に佐世保の居殘りに比べりや、まだ〳〵難有い方と諦めるさ。』

H大尉が、

生別會

『夫もそうさね、就ては一つ生別會をやらうぢやないか？』

中尉のM君が忽ち贊成した。N艇長は尙も尤もらしく、

『生別會た一體そりや何だい？。先達ても開戰前祝會とか何とか、珍妙な名義をこしらへて、やつたぢやないか。此奴ペーが溜つて、一人で行くのがきまりが惡いものだから、色んな名義を付けて人を誘ひ出しに來やがる。抑も今日を以て如何なる時と心得へて居るんだい。酒など飲んで、ウダ〳〵言つてる場合ぢやないぢやないか。國家の存亡、社稷の安危に關する場合ぢやないか。』

當屍包馬革

N『ハハ、、、、馬鹿に聖人みた樣なことをおつしやるね。どこを押したら、貴樣そんな生意氣な音が出るんだい？。先達てのはアリヤ疎通會で、其の前のは豫餞會で、其の前のは新年宴會さ。男兒劍を提げて軍に從ふ、當に屍を馬革に包むべしぢやないか。此間まで頻りに人を引張り出しに來居つた奴が、適〳〵女房を貰つたとて、さう

山とα

嘲か心殘り

無闇に澄すなよ。そんなにサイノロジーぢや、出て十日も經つたら、きつとホームシックに罹るぞ！。しつかりしろ！』

N『やくな〳〵、併し戰爭に行つて死ぬのは屁でもないが、ホームの味を知らずに死ぬる丈が聊か心殘りだと、こぼしたのは、抑もアリヤ誰だい？。ねえ中尉？』

H『さうさ、オレも一時はさうも思つたが、誰かの樣にホームシックにでもなると困るから、茲に前言を取り消すさ。それに閻魔の役所でも、未婚者は未丁年者に準じて、一等罪が輕いと云ふことだからね。』

N『馬鹿なことばかり言ふ奴だね、明けて幾歲になるんだい？』

H『ハイ、寅の歲の明けてよう〳〵二十七歲になります。親は代々……』

折しも隣の艇からK中尉が上陸を誘ひに來たので、女房論は一先づ收まつた。生別會は明晩やることに極つたが、扨て場所は何處にしよう？。H君が山說を持ち出すとM君がα說を主張する。其の理由と

する所は、H君はαに殘りがあるので、此の際聊か工合が悪いと云ふ。M君は一昨夜山でホリ過ぎたので、頗るきまりが悪いと云ふ。併し多數決で、どう〳〵山と決定した。やがてM中尉は服を着換へ、大めかしにめかし込んで、K中尉と共に、

『艇長願ひます！』

軍艦で『願ひます』と云へば、上陸のことである。後はN艇長とH艇長の差し向ひで、話は稍や眞面目になつた。

「願ひます」

H『ところで家はどうする積りかい？』

N『まア當分佐世保へ置いておこうと思ふがね、幸こちらに遠い親戚が居るから、そこへ同居こす積りぢや！』

とんだ十段目

H『折角貰つたかと思へば、タッタ十日で御出征とは、ほんとにお氣の毒樣だね、實際同情するよ。とんだ十段目ぢやないかハ、、、、』

N『オレも最初は斷つたんぢやけれど、先方でどうせ軍人にあげる以上

は、事があれば戰死する位は覺悟の上だから、是非にと云ふので、どう〳〵貰つたんだがね――こんなことなら、今暫らく見合せばよかつたにと思つて居るんだが今更仕方がない。』

今更仕方がない

H『甘く言つてるぞ、あの方でなけりゃ姫はいやだ〳〵と、おむづかり遊ばしたのだらう。お安くないね、今晩更めて敬意を表しに行くからうんと奢れ！。御馳走が少いと、先夜の樣に十二時迄動かんぞ！』

N『厄介な御客樣だね。御馳走すりや御輿を据ゑるし、せにや動かんと云ふし、寧ろ御馳走せざるが德かね。「Hさんは面白い方だけれど、御酒をお飲みになるとこわい」と云つたぞ！』

厄介な御客樣

H『誰がよ？。そんなに遠慮しなくつても、こんな時こそ、うちの令夫人がとか、乃至山の神がとか、明白に云へよ。――「だから貴方も餘所へ行つて御酒をお上りなさるなよ」か、溜らないね。ハ、、、、』

溜まらないね

と、H艇長は快活に笑ひながら不圖時計を見上げて、

御待兼であらう

『オヤ早や五時だ。道理で腹が減つたと思や。失敬！、々々！、定めし初菊殿がお待兼であらう。それぢや、オレは是から司令の所へ行つて、明日の會のことを話すからね。……』

と、菊印の卷煙草を一本つけて立ち上ると、N君は當番を呼んでボートの用意を命ずる。

N『オレは明日は家の片付の爲め、艇へは來ないかも知れんから司令に、さう斷つて置いて呉れ！』

H『ウム。會には出るだらうね、……呼んで置かうか？。アハ、、、、』

ボートを見送つたH艇長は、憮然として、

『矢つ張り獨身の方が氣樂だなア。……』

獨身が氣樂だ

佐世保入幡山の中腹、老松參差たる間に、稍や宏壯なる一構への家屋が聳える。樓上に登つて見渡せば、佐世保の市街は歷々として雙眸の裡に落ち、港内の艦船は點々指顧の間に在る。夏も冬も檐端に紅提灯

山とα

晝夜不論の別天地

がぶら下つて居るので、一見して其の如何なる家たることは判かる。吾々は單に之を山と呼んだ。縱令軍艦の名を忘れる海軍士官はあるとも、佐世保の山とαとを知らぬ士官はあるまい。坂幾うねり、石段幾十階、麓より上まで一息に登れば、冬でも相當に汗が出る位である。如何なる靈驗御利益があるかは知らぬが、長靴の埋もる雨の夜も、頰べたの切れて飛ぶ風の日も、老壯を問はず職業を論ぜず、登山の信者の絶間がない。殊に事件發生以來は晝夜不論の別天地である。

今しも階下の一室櫻の間とかに、海陸幾千の燈火を硝子越しに眺めながら、火鉢を圍んで時事を談じて居る七八名の海軍士官がある。三本筋の少佐を旗頭として、其の他は何れも二本や一本半の血氣滿々たる若武者ばかり、之ぞ不日佐世保を出發せんとする某艇隊の生別會である。

×『△△は大へん遲いね。』

奢らしてやらう

チイドロとは違ふ

オヽ煙かバイ

○『あいつ艇で、まだ何か書いて居たよ。』

□『きつと、エンゲージに送る手紙でも書いて居るんだらう、今晩一つ奢らしてやらうぢやないか。』

噂をすれば影とやら△△△中尉がハイカラな商人服姿でやつて來た。

『遲いぞ〳〵。』『大分めかし込んで來たな』。『こいつ野心があるんだらう。』などゝ攻撃の矢が、忽ち四方から注がれた。

△『馬鹿言へ！賣れッ子は御座敷が忙しいからね、貴樣等の樣に宴會とさへ云や、何時でもイの一番に驅け付ける樣なチイドロとは違ふんだよ。』

頭數が揃つたので、一人が呼び鈴に手を掛けた。やがて顏の赤いメードが、亂暴に襖を引き開けながら、『御用？』と顏を出すや否や、『オヽけむかバイ』と、一足後へ退つたが、またヅカ〳〵と入つて來て、

『どんげん煙かもんじやろかい、こんげんこと仕て置くと、ほんのことと

遠慮も糸瓜

ほんによそわしいか

御挨拶

毒ですバイ！』

と、お客樣なんかに遠慮も糸瓜もあつたものでなく、緣側の障子を開け放して仕舞つた。切る樣な寒い風がびゆう〳〵吹き込んで來る。ランプの火がボッ〳〵と息をする。一人の中尉が、

『コラおたんちん閉めろ！寒いぢやないか。』

『どうせおたんちんですバイ、ほんによそわしか。』

メード先生ぷり〳〵しながら、疊を踏み鳴らしつゝ襖ぴしやりと出て行つた。『亂暴な女ぢやなア、アハヽヽヽ』

三本筋の少佐を正面中央に据ゑ、左右兩翼に筋の順序に陣取つた。手に垢切れのありさうなSも五六人やつて來た。其の大多數は新婚のN大尉を包圍して意地めて居る。幹事役のH大尉より、『今晩は……』と御座付の挨拶が濟むと、身體の小さいO少佐が、頻りに卷煙草をいぢくりながら、咳一番して徐に口を開いた。

雨となるか風となるか

地の利は人の和に如かず

戰影

御承知の如く我が艇隊は上命に依りて、愈々明後日竹敷に向つて出發することゝなりました。時局の推移は雨となるか風となるか、今日の所未だ俄に判斷は出來ませぬが、いつ何時、急轉直下の勢を以て大雷雨となるかも知れません。不肖乏を艇隊司令の職に承けまして、學識經驗、共に乏しくはありますが、唯滿腔の赤誠を以て諸君と共に、國家に盡さんことを期して居ります。昔から天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと申すこともあります故、吾々が能く相和し相一致して各其職に努めたならば、我が艇隊微力なりと雖も、亦相當の功を樹てゝ國恩の萬分の一を報ずることが出來るであらうと信じます。就いては司令に於て足らぬ處は、充分諸君の忠言と助力とを希望致す次第であります。若し幸にして時局が平和に解決せらるればいざ知らず、否らざる時に於ては今夜此の席に列する人々が、再び一堂に會して、此の世の酒を酌むことが

生別死別の宴

隣座敷と聯合演習

出來るか否やは、今日大なる疑問であらうと思ひます。卽ち今夜の宴こそ生別死別の會でありますれば、御互に胸襟を打ち開いて充分愉快に送りたいと思ひます。敢て我が艇隊の爲め、幷に諸君の爲め、武運長久の乾杯を致します。

第○艇隊萬歲！萬歲!!萬歲!!!。

司令の挨拶が濟むと、後は無禮講で、飲めや歌への大騷ぎ、躍るやら、跳るやら、N君得意の裸踊も出た。司令十八番のヨサコイ節も出た。其のうち四人の有妻黨は、いつの間にか座を外した。後にはH大尉を旗頭に、何れも天下無宿の浪人ばかり、とう〳〵襖を取つ外して、隣座敷と聯合演習が始まつた。隣のA大尉が、

A『やア、誰かと思つたら貴樣か。……馬鹿に元氣が好いぢやないか。』

H『知れたことさ、明日にも戰爭がオッ始まらうと云ふ今日ぢやないか。元氣が好くなくつてどうするかい。ハ、、、、、オレところは明後

日愈々出るがね。……』

A『そうか？そいつは頗る氣が早いね。ぢや今晩はお別れに大に飲まう、何か言ひ置きはないか？』

形見

H『今になつて言ひ置きも糞もあるものかい、併し死んだら生前の誼みを以て、洋服屋の拂ひを形見に進呈するからね。』

香奠

A『そいつは大に難有い、其の代り香奠にはレスのペイを送るが好いか。』

H『ところで貴樣とこは何時出るんだい？大きな奴がノサばつて居ると、港の場塞ぎになつて仕樣がない。早く出ろよ！』

船はちやんころでも

A『オレところなんざア、憚りながら天下の御旗下ぢや。愈々の時が來なけりや動かないさ。水雷艇なんかの馬の脚とは役者が違ひますタイ。』

H『馬鹿言へ！。鷄口となるとも牛後となる勿れぢや。船はちやんころでも、獨斷專行權を有する獨立指揮官樣ぢやぞ。貴樣等の樣に『コ

ツ〳〵〳〵副長五分前です！』なんかとは聊か格式が違ふよ。今に見ろ、敵の四五隻もぶち沈めてやるから。其時になつて金鵄勳章を半分分けて呉れなぞと言つたつて、やりやしないぞ。』

格式が違ふ

A『今からさう大きなことを言はずと、夫よりも、海の中へ眠り轉げて、捕虜なんかにならない用心をしろ！』

先祖代々の日本人

H『失敬なことを言ふな、これでも先祖代々日本人ぢや、首が飛んだつて捕虜なんかに爲つて堪るかい。』

意氣地のないことを云ふな

やがて一人減り、二人減り、遂にH大尉とA大尉と唯二人のみとなつた。

A『あア醉ふた〳〵、もう寢よや。……オレは明日の八時から當直ぢや。』

H『意氣地のないこと言ふな！。一晩位飲み明したつて、翌日の當直が出來ない樣な體で、戰爭が出來るかい。……も一つ飲め！。』

A『、、もう厭やだ！。苦しい！。醉眠紅樓君勿笑か。』

H『そこだ〳〵、古來征戰幾人還ぢやないか、サア起きて飲め〳〵。オレがお酌してやるのも、今晩ぎりかも知れないんだぞ。』

S『そんげん起しますな、氣の毒かバイ。』

H『貴樣等が餘計なこと言はすと、スッ込んで居れ！。もう十二時過ぎや、Sなんか歸れ〳〵！』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

いつの間にか二人とも肱を枕にグー〳〵。どこかの座敷では、まだ『酒持て來い！　酒持て來い！』と呼んで居る。皿か杯の割れる音がカチヤン〳〵。

三　出征

頃は一月半ば過ぎ、今日は自分等の艇隊が、愈々竹敷に向つて出發する日である。ふだんは近所の子供達が、『十年この方鍛ひたる我が武を試すは今なるぞ』と、聲勇ましく軍歌を唱へながら、學校へ行くのを聞いて、始めて床を匐ひ出るのだが、今日は八時の出艇と云ふので、六時前に起された。再會期し難しとやらで、昨夜遲くまで知友と共に酌み交したる酒は、まだ醒めやらず、頭が頗る重い。雨戸を明けると、東の空は僅に白んで、氷の如き殘月が愛宕山の頂に懸つて居る。戸毎の屋根に措く霜は、白きこと雪の如く、將監嶽より吹き卸す寒風は身を切る許りである。顔を洗つて二階に戻ると、早や膳が用意してある。出征の首途を祝ふしるしとて、下宿のおばさんが親切にも付けて呉れたるお頭付の小鯛一匹とお銚子一本。自分は一つ飲んでおばさんに差す。

流石女の

あればよいなけりやよい

まア延喜の惡い

『永らく御厄介になりました。命があつたら、また御目にかゝります。どうか御機嫌よろしゆう……』

と云ふと、流石女の情に脆く、

『おからだを大切になさつてね。御無事で歸つてゐらつしやいよ。』

とおばさんの目には早や露が宿つて居る。美しき靜子嬢は何とも言はず、俯向いた儘膝の上で、無意識に指輪をいぢくつて居る。自分は戰爭になればよい、なればよいと思つて居るのに、おばさんはまた反對に、戰爭なんか、なけりやよい、なけりやよいと繰返して云つて居る。

『靜子さんにお給仕して頂くのも、これが一生のお仕舞かも知れんから、今朝はうんと頂戴しますよ。』

と云ふと、

『まア延喜の惡い、妾の樣なものゝお給仕では、嘸おいしくありますまいが、どうか澤山に……』

もうこんな口を利く

れ、おちかさん

三月以前に始めて下宿した時には、自分達の顏を見ると、直ぐ臺所へ隱れて、大きな聲もよう出さなかつた人が、もうこんな口を利く樣になつた。

『今度歸つて來たら、また臺所へ隱れるんですか？』

と冷かすと、

『アレ、またあんな言を。――其の時は波止場まで御出迎へに參りますわ。』

と言つたが、忽ち顏を眞赤にして、

『ね！、おつかさん。』

風來坊の氣樂さには、後の仕末や片付などの心配もなく、不用の品は一切下宿へ預け、日用品ばかりを鞄へ拋り込んで玄關へ出ると、家內一同が送つて呉れた。

『それでは行つて參ります、お土產には露西亞ボーの首でも澤山持つ

て歸りましよう！』

おばさんは袖で目を拭きながら、

『どうか御達者でね。…』

十になる腕白の光ちやんが、

僕も戰爭に行きたい

『僕も戰爭に行きたいなア、大砲の彈丸を持つて歸つて頂戴ね。』

三つになる君子さんがニコ〳〵しながら、紅葉の樣な手で失敬をする。靜子さんが口の內で何か言つたが聞き取れなかつた。車夫に鞄を持たして戶外へ出ると、光ちやんが『おッ母さんや姉さん、泣いたりして弱蟲だなア』と云ふのが聞へた。

町の曲り角で後振り向いて見ると、今まで自分が借りて居た二階から、皆で尙ほ見送つて居た。戰爭熱にばかり浮されて居た自分の胸中にも、此時初めて一種無量の感慨が閃めいた。

無量の感慨

艇へ歸ると、航海準備は旣に整うて、煙突からは黑い〳〵煙を吐いて

居る。八時になると司令艇から『直に出艇』の信號があつた。各艇順次繫留浮標を離れて陣形を整へた。幾多艦船の間を縫うて進むと、各艦の朋友知人から、『愉快なる航海を祈る』とか、『貴隊の武運長久を祈る』とか、種々の訣別的信號がある。

訣別的信號

後見返ると佐世保の市街は、早や半ば煙に消へて居る。望遠鏡で眺めると山の二階からは、約束の如く赤いハンケチを振つてをるものがある。佐世保の山河再び見ることの、有りや無しやと思へば、坐に名殘りの惜まれて、一種云ふに云はれぬ感がする。向後崎とは誰が名付けたか、佐世保軍港を出て行く幾多の征人、一度は後向き返らぬものはあるまい。敢て卑怯と笑ふ勿れ、未練と誹しる勿れ、軍人とても人である、血も通へば涙もある。

向後崎とは誰が付けた？

空は快晴だが北風が非常に强いので、沖には帆影の跡絕へて、獨り白波が怒つて居る。前方遠く見渡すと五島の山々は、靑螺の浮ぶが如く

佐世保軍港一の門

翠黛の鬟くが如く、雲か山か、將た波か、を疑ふばかりである。德川の昔「キリシタン」信者を流した所だと聞く黑島を右に過ぐれば、浪は次第に高くなつて來た。佐世保軍港の一の門たる志自岐の鼻をかはると、朝鮮海峽を吹き荒んだ寒風と、玄海灘を暴れ卷くつた激浪とが、尙ほも其餘怒を逞しふして居る。木ッ葉の如き小さき水雷艇は轉輾動搖して、怒濤は瀑の如く艇內に打ち込んで來る。狂濤の艇底を叩く激動と、「スクリュー」の空轉する震動との爲め、今にも船體が眞ッ二つに折れはせぬかと怪しまれる。此の荒れ模樣では迚も玄海が越せさうもないので、已むを得ず薄香灣に避泊した。

田助の樂境

灣は平戶の背面に當るので、坂一つ越ゆれば所謂田助の樂境がある。表面ばかりの僞善的道德と、窮屈極まる法律規則で金縛にした、文明開化とかの世の中にも、斯かる樂鄕のあればこそ、板子一枚地獄の商買も出來るのである。風と爭ひ、波と戰ひ、死生を鯨鰐に委ぬること日亦夜、

海上生活者

僅に一生を九死に得て、錨を安全なる港に投じたる時、是れ吾人海上生活者に取りて第一の愉快である。上陸入湯して潮に浸りし衣服をば、緩やかなる袍衣に着換へたる時、是れ吾人第二の愉快である。浴後淺酌座に美人あり慇懃に我を遇す、是れ吾人第三の愉快である。元來陸上の動物たる人間をして、其の天性に反いて海上生活を營ましむる以上は、吾人は或點に向つて治外法權を要求するの權利があると思ふ、叱ッ！。

治外法權

頭つん〳〵胸むか〳〵

風が稍や凪いだので、翌朝薄香を出で竹敷に向つた。平戶島を過ぐれば、こゝは名に負ふ鳥も通はぬ玄海の灘。風は輕いが波は頗る高い。昨夜の宿酔尙ほ未だ覺めず、船の酔と酒の酔とがチャンポンになつて、頭つん〳〵胸むか〳〵、苦しきこと非常である。口からは酸ぱい樣な水が泉の如く湧いて來る。胸先には苦い胃液に交つた食物が、强壓力を以てこみ上げて來る。此處らで小間物店を開いては、聊か風紀を害

する虞があるので、苦いやつを飲み込み〳〵、齒を喰ひ縛つて前續艇を見ると、中尉が手欄にもたれて、盛に黃色いものを吐いて居る。後の方では新米の水兵が、競爭でゲー〳〵をやつて居る。沖へ出づるに從つて、海は益々〳〵荒く、艇は愈々〳〵動搖する。海上六十浬を揉みに揉まれて、ヤット對州地に辿り着いた時には、潮水の爲め褌まで濡れた。

褌まで濡れた

竹敷に入港すると、盥に竿竹を立てた樣な、デモ戰艦「扶桑」を御大將とし、女の駒下駄を倒に浮かした樣な「平遠」や、ペルリ時代の遺物かと思はれる「海門」「磐城」などの面々が、鳥なき里の蝙蝠然として、港を狹しと控へて御座る。佐世保で雄風堂々、英姿颯々たる聯合艦隊を見た時には、天晴帝國の海軍かなと、頗る心丈夫な感じがしたが、今また竹敷へ來て、此のよい〳〵軍艦までが、戰線に引き出されて居るのを見ると、迚も大きな聲では海軍國など〻言はれた次第でない。枯木も山の賑ひ、犬も御供の頭數かは知らぬが、喧嘩の連れに年寄は禁物である。

鳥なき里の蝙蝠

犬も御供の頭數

吾々ばかりなら、進むにしても、退くにしても、自由であるが、こんなよゝ艦隊と一處では、正かの時には、其巍れの外はない。口の惡い水兵達は之を呼んで、滑稽艦隊とか、厄介艦隊とか名付けた。此後折々港外に出でゝ、艦隊運動などをやつて居る處を見ると、宛然化物の行列である。如何なる敵も、斯かる骨董艦隊を以て、戰爭をやらうと云ふ、我が海軍の大膽に驚くであらう。

宛然化物の行列

明日にも開戰になることかと、大急ぎで竹敷に回航したが、其後五日經つても、十日過ぎても、時局の前途は更に判らない。一月も早末となつたが、ルーター電報などは、平和解決の望みありなどゝの消息を傳へて居る。今更平和などゝは餘り人を馬鹿にし過ぎた話である。縱令日露兩國の關係は平和に收まつても、一旦沸騰點に達したる國民の血は、容易に冷却せしむることは出來まい。或は○○諸公の生命保險率が騰貴するかも知れぬ。併しそんなことは吾々直接の關係がない。

今更平和などゝは

唯困るのは、武裝手當を宛にして作つた防寒服や、戰時加俸を當にして連夜決行したる送別會の財源が無くなることである。左ればと云つて當世流行の債券發行も出來ず、外債募集は尙ほ更六づかしい。之には吾々一同大恐慌を來したものであつた。

吾人の大恐慌

二月の二日か三日であつたと思ふ。旅順の敵艦隊は昨朝何れにか出港して行衞不明である。就ては今夜あたり敵驅逐艦が襲擊に來るかも知れないから、其の隊は今夜港外の哨戒に出ろと云ふ命令が降つた。對州名物の空風はピユー〳〵と峰の梢を吹き鳴らして、雪さへちら〳〵飛んで居る。部屋の內で火鉢に嚙ぢり付いて居てさへ寒い此の天氣に、夜の哨艇とは誠に御苦勞千萬な話である。去れど命令なれば致し方もなく、こゝらが戰爭の戰爭たる處であらうと、外套合羽に身を固め、日暮前に竹敷を出港した。風は强く、波は高く、灣口を出ないうち、早やザブリと頭から一つ浴せられた。頸筋から背中へ流れ込む潮

出港命令

戰爭の戰爭たる處

水の冷さは何とも言へない。活動寫眞で驅逐艦や水雷艇が荒波の中を潛つて進むところは、隨分勇壯活潑で、大に拍手喝采を博する幕であるが、扨て之に乘つて居るものゝ爲めには、實に地獄の責苦に遭つて居るのである。黑白も分かぬ眞暗な荒海をば、寒さにふるえ、眠さに苦しみながら、夜通し忠實に警戒したが、敵らしいものは影だも見えない。翌朝竹敷に歸ると、敵の艦隊は昨日已に旅順口に還つたとのことである。なーんのこつた！。

地獄の責苦

四　對州

日本海の西門たる朝鮮海峽の眞中に浮べる島根、是ぞ名に負ふ對馬國、通稱對州である。

鬼界ケ島の兄弟分やの如く

對州とし言へば、世人往々絶海の孤島、俊寛僧都の流されたる鬼界ケ島の兄弟分の如く考へ、山に草木なく、野に花鳥を見ず、住民は額に角が生へて、日本語が通用しない所かの樣に思ふて居るものがある。併し事實は之に反し、全島蓊蔚として冬尙ほ翠濃く、白鶴喬松に巢くうて草花徑畔に薰つて居る。とは聊か譽過ぎる嫌ひもあるが、兎に角之を對岸朝鮮の赤裸々たる禿山に比べると、實に地質的「ソマトーゼ」の好看板である。

地質的ソマトーゼの好看板

由來對州木炭の名は、普く九州、中國あたりに響いて居るのを見ても、其の如何に樹木が繁茂して居るかゞ想像されるであらう。一體內地の住民が炭の供給を島地に仰ぐなどは、炭價暴騰の今日、農林

學上の研究に價する一問題であるなどゝ、途方もない商買ちがひの怪氣焰を吐いたものもある。

朝鮮の古い書物を見ると、對州は素と朝鮮の屬島であると書いて居る。そんな穿鑿は暫く措き、任那朝貢以來、對州は朝鮮交通の要衝に當つて居るので、自然內地との通航往復が頻繁であつた爲めか、言葉の如きも鹿兒島の喇叭や、奧州のツーズなどに比べると、遙に日本的である。

鹿兒島のダツパと奧州のツーズ

島民の容貌に至りても、熊襲系の高き體骨や、アイヌ族の野獸髯が少く、婦人は概して美しい。何代高尾や、幾世ぼんたとかは、共に對州の產として、常に島民の誇りとする所である。島の南端に豆酘と稱する一部落がある。此の村の住民は古來他部と婚を通ぜず、風俗習慣の如きも大に隣村と異つて居る。或る人類學者の說に依ると、彼等の祖先は恐らく南淸地方からの漂流民であらうとの事である。

豆酘部落

對州は又土地が外國に近い丈あつて、古來屢々外寇の難に遭うた。

元寇

愛兒の肉

錆びたりと雖も錦一筋

就中文永十一年と弘安四年との二回の元寇は、最も慘烈悲凄を極めたもので、男子は腹を裂かれ手足を斷たれて嬲殺となり、女子は掌へ穴を穿たれ之に繩を通して、舷に珠數繋ぎにされたとの事である。島の古老の話によると、當時纔に賊手を逃れて山中に隱れたる者も、嬰兒の泣聲に依つて賊に發見せらるゝを恐れ、手づから愛兒を絞殺し、終には食に窮して其の肉を食ふたとさへ傳へられる。斯かる殘虐非道に遭ひながら島國の悲しさに、他國の救援を受くることも叶はねば、隣國へ逃げることも出來ない。そこで對州は對州人丈で防守せざるべからずと云ふ、全島皆兵主義の觀念が深く島民の腦底に刻まれてあるので、昔は如何なる山間僻地に至るも、各戸必ず、錆びたりと雖も錦一筋、生倉と雖も劍一振は、床の間に飾られてあつたと云ふことぢや。從うて今日に於ても婦女子に至るまで、其の敵愾心の強いこと實に驚くばかりである。『今に露西亞ポーが攻めて來ると、御前達は又掌へ繩を通

擂丸でも握り潰してやる

赤壁の勝も

されて、露西亞へ連れて行かれるぞ』と戲談に脅かすと、內地の女なら大概は青くなつて震ひ上がる所だが、彼等は一向平氣なもので、無邪氣な口から『御前樣達が戰爭に負けなさつたら、わし等代りに行きまさア、鐵砲はエー打たんから、擂丸でも握り潰してやりまさア』と。敢て問ふ、三越や白木屋への突貫に勇敢なる帝都の夫人令孃達、果して此の勇氣ありや否や。

對州は大船越の瀨戸に依つて、上縣下縣の二島に分たれて居る。上下兩島の中間には、曲折分岐せる無數の澳灣が陸地深く食ひ込んで、海岡を眺めると、恰も珊瑚樹の枝を廣げた樣である。此等の澳灣は、或は斷崖絕壁を削りて、龍淵深碧を湛へ、赤壁の勝も斯やと疑はれる所もある、或は奇松波に飼ふて白砂玄岩相參差し、人跡絕へて天地悠々、仙人の鶴に駕するも斯かる境かと怪しまれる所もある。殊に海水の清澄潔冽なる、能く十尋の水底をさへ見ることが出來る。若し夫れ輕舟に棹

日本風景の雙絶

し、意に任して此等の入江を遇遊せんか、汀浦曲折盡きんとして盡きず、巉岸逼つて又潤くる處、松島岩嶼相送り相迎ふ。其風景の絶佳なること、自分が知れる範圍内に於ては、駿河灣の富嶽と共に、實に日本風景の雙絶であると思ふ。即ち後者は壯麗にして雄渾である。前者は雅致にして清秀である。彼の日本三景たる松島は勝は勝なるも水が濁り易い。嚴島は美は美なるも俗である。橋立は奇は奇なるも變化がない。大磯や須磨に至りては、唯夫れ、肺病患者の轉地療養地たると、デカタン派男女の海水浴場たるに適するに過ぎないとの世評がある。自分は對州が其の地、僻隅に偏在して名玉徒に瓦礫の間に埋沒せるを惜しむと同時に、其の地僻遠に在るが爲め、天成の美景をしてあたらべンキ塗別莊と、醜惡なる廣告畫とに、蹂躙俗化せられざるを祝するものである。

對州の爲に祝す

女美にして風景佳なりと聞かば、自然主義者流は恐く垂涎三尺、對州

最後の靈藥

移住を思ひ立つかも知れぬが、それは到底だめである。元來對州には食料が不自由である。繁華な町は別として、少しく田舍へ行くと、住民の常食は薯と黍ばかりで、麥は寧ろ上等の部類に屬する。若し夫れ米の飯に至りては、年に一度の祭禮の御馳走と、垂死の病人に與ふる最後の靈藥である。『お米の御飯サ頂いてさへ助からねいんだけれ……』とは、喪家に對して屢々用ゐらるゝ弔慰の詞である。ところが對露事件の發生以來、要港部の石炭運搬人夫として、奥山の炭燒男や木樵女が、澤山竹敷へ傭はれて來た。彼等は起死回生の靈藥たる米飯を飽食した上、一圓内外の日給を得るので、若い男などは折々町へ出掛けては豪遊(?)を試みる。女は蓬髪に花簪など挿してよろこんで居る。彼等に對する通船親爺の觀察が面白い。

通船親爺の觀察

あん畜生め等、昨日まで山奥で猿と一緒に薯の尻ッぽ嚙つて、屁ばかりたれて居やがつた癖に、けふ日ぢや御上の御用てんで、大きな御給

迎ても山へは歸れない

金頂く上、米の飯まで食うて贅澤ばかりこいでくさる。今に御用濟みになつたら見居れ、奢の癖が付いて迎ても山へ歸られねいぢや。

阿魔達や朝鮮へでも渡つて。△△になる位が關の山だろ。

知らず、分を忘れて徒に輕薄奢侈に流れたる、我が國民の歸趨する處は何處ぞ？。

對州名物鳶に烏

海軍要港部の所在地たる竹敷の町は、前記入江の一つに濱せる淋しき一漁村で、約三百許りの豚小屋然たる人家が、ジグザグとして立ち竝んで居る。道路の狹くしてドブ臭きと、家屋の低くして穢きとは、宛然朝鮮の町の如しで、要港部に屬する建築物の外、家らしき家は僅に指を屈する程である。『對州名物鳶に烏又も多いが屋根の石』とか云ふ俚謠さへある位で、全村の九分通りはソギ葺きの屋根に、石の重りが置いてある。鳶と烏も隨分多い。ぼんやりしとると、甲板上にある晝飯の牛肉を掻つ浚はれるばかりか、臭いやつを頭の上へポテリと落される。

小供製造所

東京の人は延喜が良いと悅ぶかも知れぬが、あまり氣持の良いものではない。こんな處に勤務する者こそ、一種の流罪人同樣で、食ふ事と寢る事の外、何等娛樂の道がない。江田島と竹敷の官舍とは、小供製造所なりとは、吾人の往々耳にする所である。年に一度か二度の村芝居や、田舍廻りの操り人形位を樂みとせらるゝ官舍の奧さん達のことを思ふと、轉た同情の念に堪へない。

燭暗き處數行美人の涙

シヤミセンの音が聞へねば、町たるの資格なしと云ふ當世の有り難さ(？)に、竹敷とても馬鹿には出來ず、艇に居ながら風が持て來る二階の端唄も聞こへる。上陸すれば燭暗き處、數行美人の涙にも浴せられると云ふことである。こゝ竹敷の町に近く、數隻の水雷艇が繫がれて居る。あまり陸岸に近いので、艇上から眺めると、宿屋の二階に乾した蒲團の模樣さへ判かる。況して夜深く風靜かなる時なぞは絃鼓の響や、キヤツ〳〵の嬌聲に、波枕寒閨の夢を驚かさるゝことも珍らしくはな

寒さに凍ふる士官室

い。鐵葉の樣な薄き鐵鈑一重を隔てゝ、外は凍るばかりの海水を以て圍まれたる水雷艇の士官室は、夜の更けると共に寒さ愈々嚴しくなる。

夢はいつも冷やかである

「スカイライト」の隙目より吹き込む風は、冷きこと針もて刺すが如く、息は天井に結んでポテリ〳〵と顏の上に落ちて來る。疊一枚にも足らぬ狹きベッドの上に、五尺六寸の頭體延ばすに由なく、毛の切れた薄き毛布の中に結ばれたる夢はいつゝ冷やかである。宵につゞきたる火鉢の炭火も、何時しか何に白雪の、灰と化して、寒燈明滅、淡く天井を照せる折しも、左舷のベッドで、

艇長が問ひ掛けた

『アヽやかましい！何時迄騷ぐんだらう！』

と、ミシリ寢返へりの音がした。右舷のベッドからカーテン越しに、

『中尉！まだ起きて居るの？』

と、艇長が問け掛けた。

附中『あまり八釜しいから目が覺めました。大概で止せばよいのに、——

昔の武士は

一體もう何時でしよう？』

長艇『ハハ……、昔の武士は轡の響に目を覺ましたと云ふが、三味線の音に夢を破るなどは頗る當世流だね。』

と、艇長が冷やかすと、

昔の豪傑は

附中『それぢや、艇長は何故目が覺めたのです？』

長艇『僕は宵からまだ眠らないのさ。』

附中『そうですか、昔の豪傑は大砲の響を聞きながら鼾聲雷の如しと云ふことを聞いたが、今の英雄は三味線の音で眠られないんですか？』

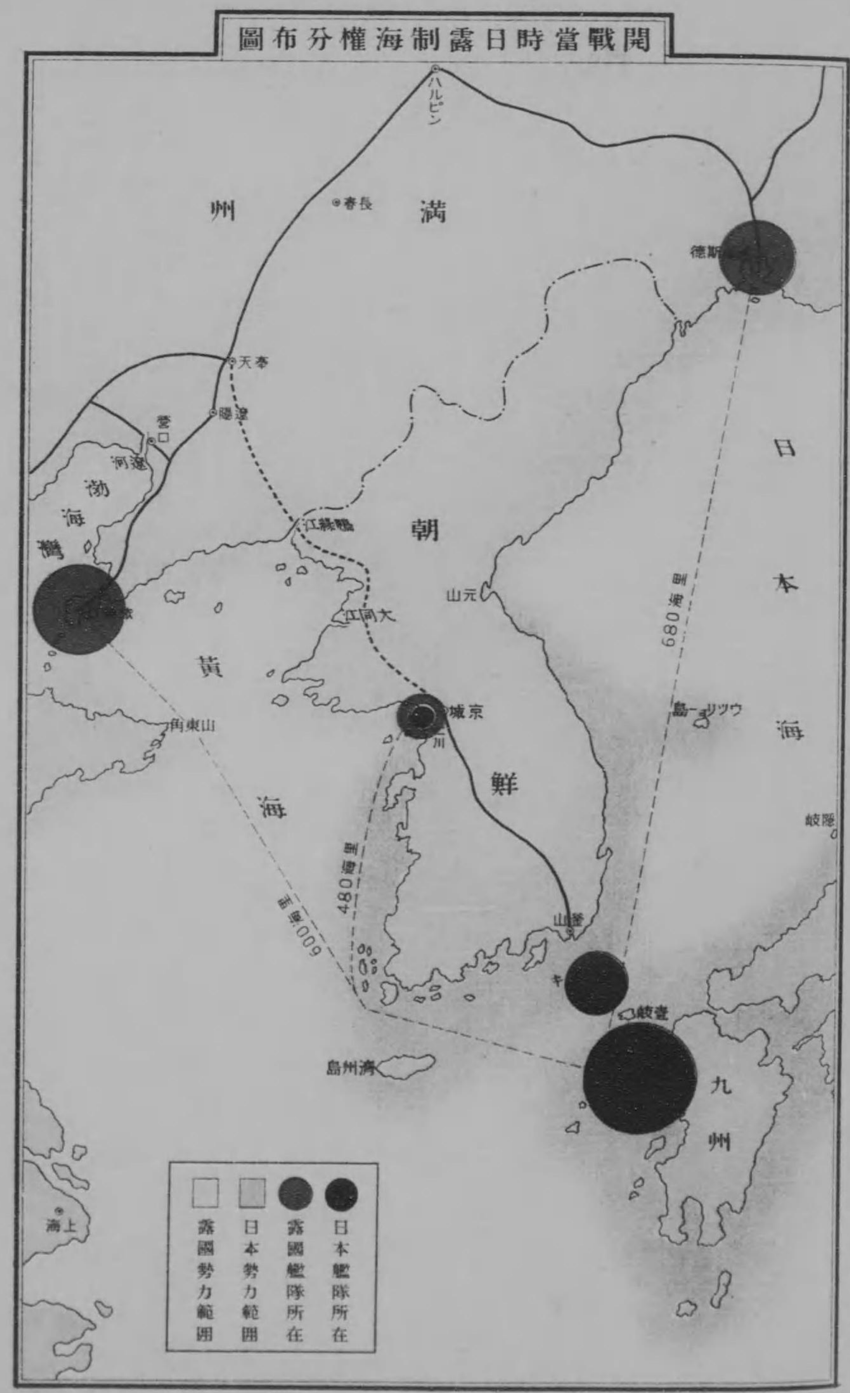
と、中尉は番ぐ手も見せず、見事一矢相酬ふた。

長艇『こいつは參つた！。併し僕は眠られないんだない、面白いから寢ないで聞て居たんだ。今こう云ふ歌を聞いたがね。

「沖が荒れるか、千鳥が騷ぐ、主は今頃玄海眞切り、心して吹け小夜嵐。」

中々うまく出來てるぢやないか？。』

露光量違いの為重複撮影



夢でも見るさ

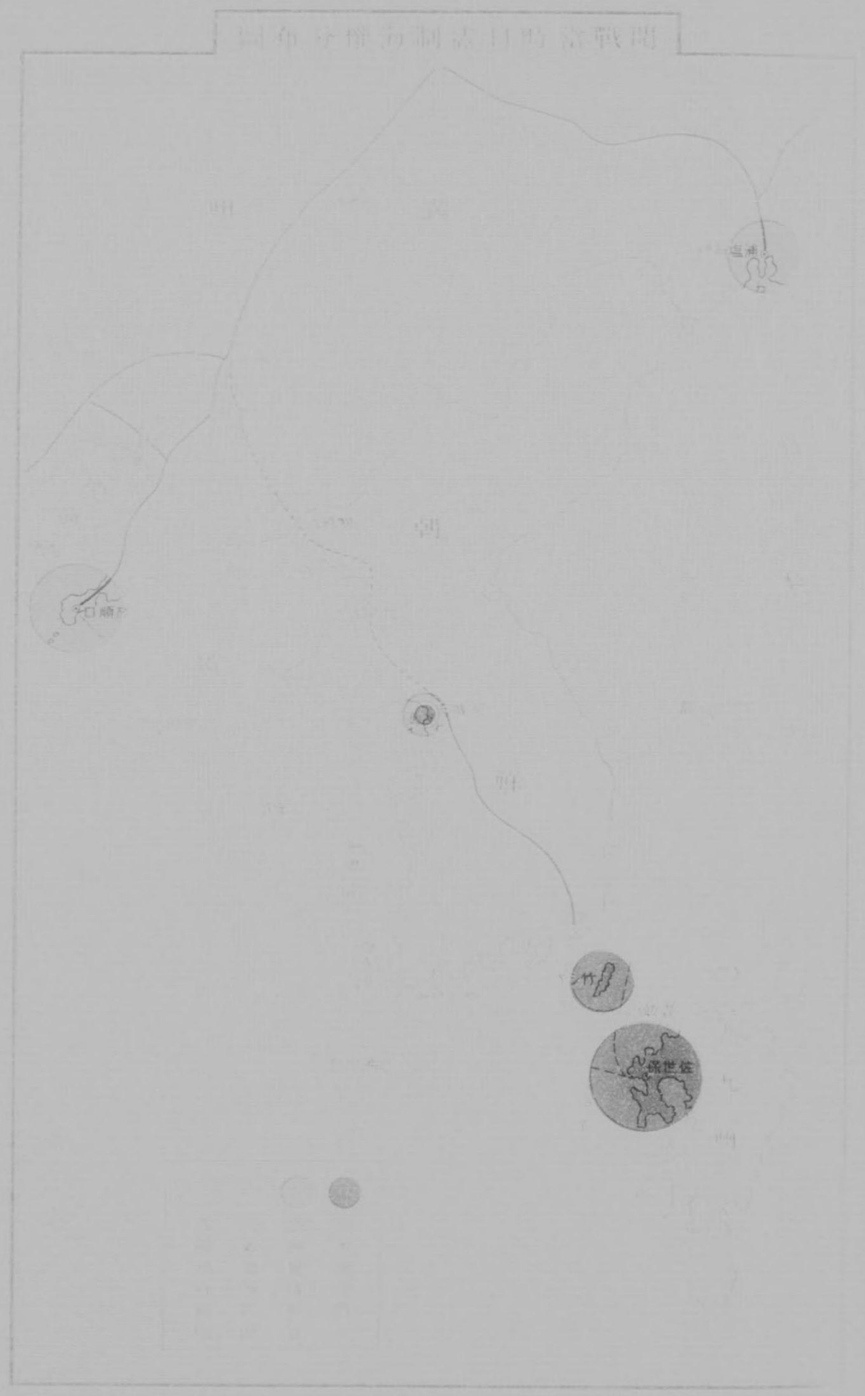
戰影

中尉『あんまりうまくもありませんなア――併しそんな歌なんか、どうでも宜いが、こんな處でグズ〳〵して居る樣なら、モ一度佐世保へ歸りたいですなア。チエストぢや……』

長藤『ハハ……仕方がない、夢でも見るさ。』

折しも、どこかの軍艦で打つ時鐘が、カン、カーン、『おやもう一時だ。』と二人の話は絶へる。やがて三味線の音も止む。後は天地寂として唯折々檣索に呻吟る寒風の聲がビユーン〳〵。

露光量違いの為重複撮影



帳

『あんまりうまくもありこんなアー樣なアー樣となるとかどうして居る樣なら、長崎佐世保へ行かも宜いが、こんな處でグズ〳〵してゐるやうなアー チェスト見るさ

たいですなア

言ふかナー 仕方がない、敵ではあるが時鐘がカン、カラン、こおやうな 時だ

指しも、どこかの軍艦で打つた味線の音も止む。後は大地震とした

と二人の話は絶へる。やがて

暗折々樹梢に呻吟る寒風の音がビユーン〳〵

降らず照らずで

大きな聲では歌もうたへず

五　開戰

世論囂々の裡に一月も既に過ぎ、二月も早や五日となつた。併し時局の雲行は依然として梅雨空の如く、降らず照らずで、陰鬱極まりない。竹敷の將校集會所は昨年祝融の災に罹つた儘、まだ新築が出來ないので、上陸しても休む處も無ければ、入浴することも出來ない。加ふるに、町へは公用の外、出ることを禁ぜられたので、趺坐をかいて酒も飲まれず、大きな聲では歌もうたへず、唯折々知人の官舍を襲うて子供を泣かし、奥さんに睨まれる位が、せめてもの慰みである。從うて毎夜の士官室會議は、不平やらヤケやらで、大にしては時局問題より、小にしては惚氣話に至るまで、隨分談論に花が咲いた。

先達佐世保から怪しき小包が來た爲め、麥酒半打の罰賃を强課せられたT中尉と、新婚早々生木を割かれたN艇長とは、頻りに佐世保歸還

佐世保へ歸して貰ひたい

尺進あへて寸退を許さず

說を唱へて居る。T中尉が、

『イザと言ふ場合には、旅順へでも浦鹽へでも、眞ッ先きに飛び込むが、用も無いのに、こんな所で、烏の小便浴びてブラ〳〵して居る樣なら、一層佐世保へ歸して貰ひたい。死刑囚でさへ最後の場合には、好きな御馳走も食はされる、會ひたき人にも會はされると云ふぢやないか、我々もどうせ死ぬのなら心地よく散りたいものだ。』

躍氣組の隊長F中尉は、

『佐世保へ歸りたいなぞと、そんな意氣地のない者は死んで仕舞へ！。折角此處までやつて來て居りながら、今更佐世保なんかへ引返へせるものかい。今や尺進あつて寸退を許さないんだ。オレに若し一艇を指揮する權能があつたら、早速旅順へ突込んで開戰の動機を作つてやるんだにね、……H艇長！私の意見に同意しませんか？』

先程から大阪名物福おこしの罐を獨りで占領し、物をも言はず、グワ

御馳走でも出さんかい

豌豆豆の一つも

校書

リ〳〵やつて居たH艇長は、足る程食つた後、『ア、まづい！』と罐を卓の上へ拋ふり出しながら、

『同意はするが但し採用の限りにあらずだね。そんな降らぬ喧嘩は大概で止して、夫よりも御客樣に御馳走でも出さんかい！。オイN！、御前處は何時來ても不味い物部氏ばかりだね。

N艇長は、襟の間から長煙管を突き込み、雁首で頻りに脊中を搔きながら、

『さん〳〵食うて置きながら横着なことを言うな！。貴樣ところなんざア、いつ往つたつて豌豆豆の一つも有つたことは、ありやしないぢやないか。』

M中尉が横合から、

『艇長！、其の物部氏たア一體何の事ですか？』

N『困るね、其の位のことが判らん樣では、……だから先達の樣に、校書を

學校の教科書のことぢやなどゝ言つて、新聞種を作るんだよ。アハ、、、、、

M『でも艇長のW・Cは Wel-Come の略字説の方が、よほど傑作ですよ。ハハ、、、、』

H『ありやオレぢやないよ！、人聞きの惡いことを言うな！』

M『ところで今の物部氏はどうなつたんです？』

H艇長は薄い髭を捻りながら頗る眞面目くさつて、

『まだ判らんかい、仕樣がないね、では説明してやらう。――一體歴史と云ふものは大に國民の愛國心を涵養する力のあるものだらう。して見ると、自國の歴史に暗い人間は、つまり愛國心が薄いと云ふものだね。そこで君は我が國に於ける佛敎の起源を知つて居るかい？』

W・C

歴史と愛國心

M中尉聊か煙に卷かれて、

『丸で中學校の試驗でも受けて居るようですね、是でも兵學校の入學試驗には及第して來たんですよ。』

怪しい及第

『持統天皇が男で、爲朝と賴朝とが兄弟ぢやなどゝ云ふ樣なことでは、及第もあんまり當にはならんよ、ハ、、、、。では、佛敎反對派の旗頭に、物部の興と云ふ人があつたのを知つて居るだらうね。……』

先程から默つて聞いて居たN艇長が、

『馬鹿にしてやがる。そんなカビ臭ひ駄洒落は二十世紀にや流行らないぞ。……ボーイ！早くいつて濃味噌の蓋でもして來い！』

N艇長は尙ほも首をすくめ口を歪めつゝ、益々煙管を奥の方へ突き込んで行く。口の惡いH艇長が又、

『穢ない奴だね、そこらへ觀音樣なんか落すな！。「N大尉涎を流して蝨を搔く」なんかは、あまり振はないぞ、同じ蝨でも王猛のと貴樣のとぢや、餘程蝨の蟲格が違ふからね。ハ、、、、』

蝨の蟲格が違ふ

N『食うか、饒舌るか、ちつとも口を塞いで居ない男だね。彈丸除けの御

未だ佐世保の垢を

守に、二三匹殖民さしてやらうか、王猛の蝨の樣に痒せちや居らんぞ。それはさうと、貴樣竹敷へ來てから風呂へ入つたか？』

『まさか風呂絶ちの御願を掛けや仕まいし、十五日も二十日も風呂へ入らないで溜まるものかい。それぢや、貴樣まだ佐世保の垢を付けて居るんだな、道理で傍へ寄ると乞食臭いと思つたら。……』

命令

何だか面白くなつて來た

本艇隊ハ特命ヲ帶ビ明六日午前五時三十分〇〇〇ニ向ヒ出艇即日歸港ノ豫定

原速〇〇海里　但シ兩罐使用ノコト

原速〇〇海里！兩罐使用！。一同の眼は等しく異樣に輝いた。『特命とは一體何の事だらう？』—『五時半の出港は馬鹿に早いね』—『何だか面白くなつた樣だぞ』などゝ、人思ひ〳〵の想像を逞うしつゝ各自の艇へ歸つた。明朝出港の命令が艇内に傳へられると、水兵室まで何となく景氣づいて見えた。

封緘至急命令書

内容は判らぬが、重大なる封緘至急命令書をば、翌日釜山と馬山浦とに居る警備艦へ持つて行つた。海は非常に荒れて居つたが無事任務を果し、艇員一同潮浸りとなつて竹敷へ歸つて來ると、旗艦から極秘書類を配布された。開いて見ると、帝國は愈々露國との交渉を斷つて、斷然自由行動を執ることに決した、夫に就て　大元帥陛下は畏くも陸海軍人に對し、優渥なる御勅諭を賜はつたと云ふ告示である。

斷然自由行動

寶刀遂に鞘を脱す、自由行動に關する大詔は煥發せられ、時局は茲に一大發展を來した。半歳の久しき、凝つて解けざりし妖雲は、忽ち裂けて霹靂一聲、日露の國交は終に全く斷絶した。時局解決の遷延に、稍やダレんとしたる、國民の意氣と軍隊の士氣は、恰も大旱に豪雨を得たる夏草の如く、英氣發奮して勇心勃々、天を衝くの概あるに至つた。併し乍ら國際學に暗き自分等は、當時、自由行動なるものが、軍事上に於いて

大旱の豪雨

戰鬪狀態に移る

果して如何なる事を意味し、又如何なる範圍にまで及ぼされるものなるかを疑ふた。實際を白狀すれば、自由行動の宣言は、單に宣戰公布の前提であつて、國民に對する警告に過ぎざる位に思うて居つたのである。此の後、艦隊は全く戰鬪狀態に移り、我々は早速其の晩から朝鮮海峽の哨戒勤務を命ぜられた。翌日になると片岡中將の率ゐらるゝ「松島」「橋立」「嚴島」の三景艦を始めとし、「鎭遠」、「須磨」、「和泉」、などの前世紀式艦隊がやつて來る。敵船捕獲規定が發布される。戰時編成が實施される。機敏な洋服屋などは、武裝手當と二箇月前渡の俸給を狙つて、早や借金取りに來た男もある。

機敏洋服屋

今日は開戰の布告があるであらう、明日は進擊の命令が降るであらうと、腕に撚り掛け鷄首して待て居たが、其の後二日經つても、三日經つても、何の命令も來ねば、何の情報にも接しない。唯每夜哨戒に疲れ果てたる眼で、兵隊の手紙の檢閲に忙がしいばかりである。戰時に在つて

手紙の檢閲

は軍機の漏洩を防ぐ爲め、下士卒の出す手紙は總て、係りの將校が檢閲する規定になつて居る。郵稅不要と云ふので、書きも書いたり、筆まめな兵士になると、年賀狀でもあるまいに、每日六七通づゝの手紙を持つて來るものもある。而も誰の手紙を見ても、『一死國に報ゆ』とか、『砲車に乘つて御目に懸る』とか、『勇往奮進生きて還らず』とか、千篇殆ど一律で、斯う皆が死んで仕舞つたら、日本海軍全滅するであらうと心配した、併し中には『國家の生死大に千歲一隅に會す、吾人何ぞ死せざるなり』などゝ、謹んで珍文全集に收めて、範を後世に貽すに足るべき名文があるので、僅かに眠氣が覺まされる。恨むらくは唯の一回も、情緖纏綿、思慕切々たる軟文字に接せなかつたことである。流石はわつばれ帝國の軍人かなと感服した。併し事に依ると、是等は或は三錢氣張つて、こつそりポストへ投げ込んだのかも知れぬ、呵々。越へて二月の十日頃であつた、例の如く「勇往奮進を」讀んで居ると、隣りの艇の中尉

書きも書いたり

「吾人何ぞ死せざるなり」

三錢氣張つてこつそりポストへ

何を呑氣に

が狽立しく、大勝利〳〵と叫びながら飛んで來た。大方、艇長と碁でも打つて、三目が二目に減づた位の事であらうと澄まして居ると、中尉が、

『何を呑氣に構へて居るんです、是をお見なさい！』

と、電報の寫をテーブルの上へ擴げた。見ると、

仁川港外に於ける海戰＝我が艦隊大勝利＝敵艦「ワリヤーク」「コレーツ」の轟沈＝我に一の損害死傷なし

擔いちやいけんよ

あまり話が甘過ぎて、何だか嘘の樣なので、

『擔いちやあいけんよ、旅順口陷落とやらん丈けが、まだしも可愛らしいね。』

戰爭開始

と云うと、中尉頗る眞面目になつて、

『今度は決して嘘じやない、今電報が要港部へ來たばかりです。』

と云ふ。未だ宣戰の布告もないのに、正かそんな事がと、半信半疑で居る中に、旗艦からも同樣の信號があつたので、始めて戰爭の既に開始せ

られたるを知つた。隨分呑氣な話であるが、自己以外の事物は殆ど知ることの出來ぬのが、戰爭の常である。此後とても、自分達でやつた戰鬪の模樣をば、新聞を見て始めて知ると云ふ樣な頓馬なことも屢あつた。

燈臺下暗し

尋で又八日の晩に行はれた我が驅逐隊夜襲の電報が來る。九日旅順口外に於ける彼我艦隊激戰の電報が來る。腕がムヅ〳〵して腰が落付かない。さて此等の諸戰報を綜合すると、旅順口に在る敵の艦隊は、既に大多數沈沒若しくは破壞されたことになる。豫て配付せられたる露國軍艦の艦型圖を廣げて、沈沒したのには黑い框、破壞されたのには赤い×を付けて見ると、後に殘るのは僅かに四隻か五隻しかない。

黑い框に赤い×

今か〳〵と水雷を調へ機械を磨いて、發進の令を待つて居た甲斐もなく、當の敵が夢の如く亡くなつたので、誠に帝國の爲めには萬歲萬々歲であるが、自分等に取りては、チン〳〵をしておとなしく待つて居る間

横合から隣のドラ猫に

に、横合から隣のドラ猫に、鰻の頭を掻つ浚はれた樣な心地がして、歡喜の裡にも一種の失望があつた。

三略に將謀欲密士衆欲一攻敵欲疾とあるが、我が聯合艦隊第一次攻擊こそ、衆心の一致せるは素より論なく、其謀の密にして攻擊の疾急なりし事、實に疾電迅雷、敵をして目を塞ぎ耳を蔽ふの暇なからしめた。

疾電迅雷

戰勝の要訣は機先を制するに在とかで、二月八日、九日、仁川、旅順に於ける我が一擊こそ、實に日露海戰。否。日露戰爭、勝敗の運命を決したものである。

露艦の損害

(註)二月八日我が驅逐隊の夜襲により、敵の最新最鋭の戰艦「レトウサザン」(排水量一二、七〇〇噸 速力一八節)及び巡洋艦「パルラーダ」(排水量六、六三〇噸 速力一九節)を擊破して、爾後數箇月間戰線に列するを得ざらしめ、翌九日艦隊の攻擊に依り自餘の諸艦に多大の損害を與へた。而して之に對する我が艦隊の損害

は極めて輕微であつた。

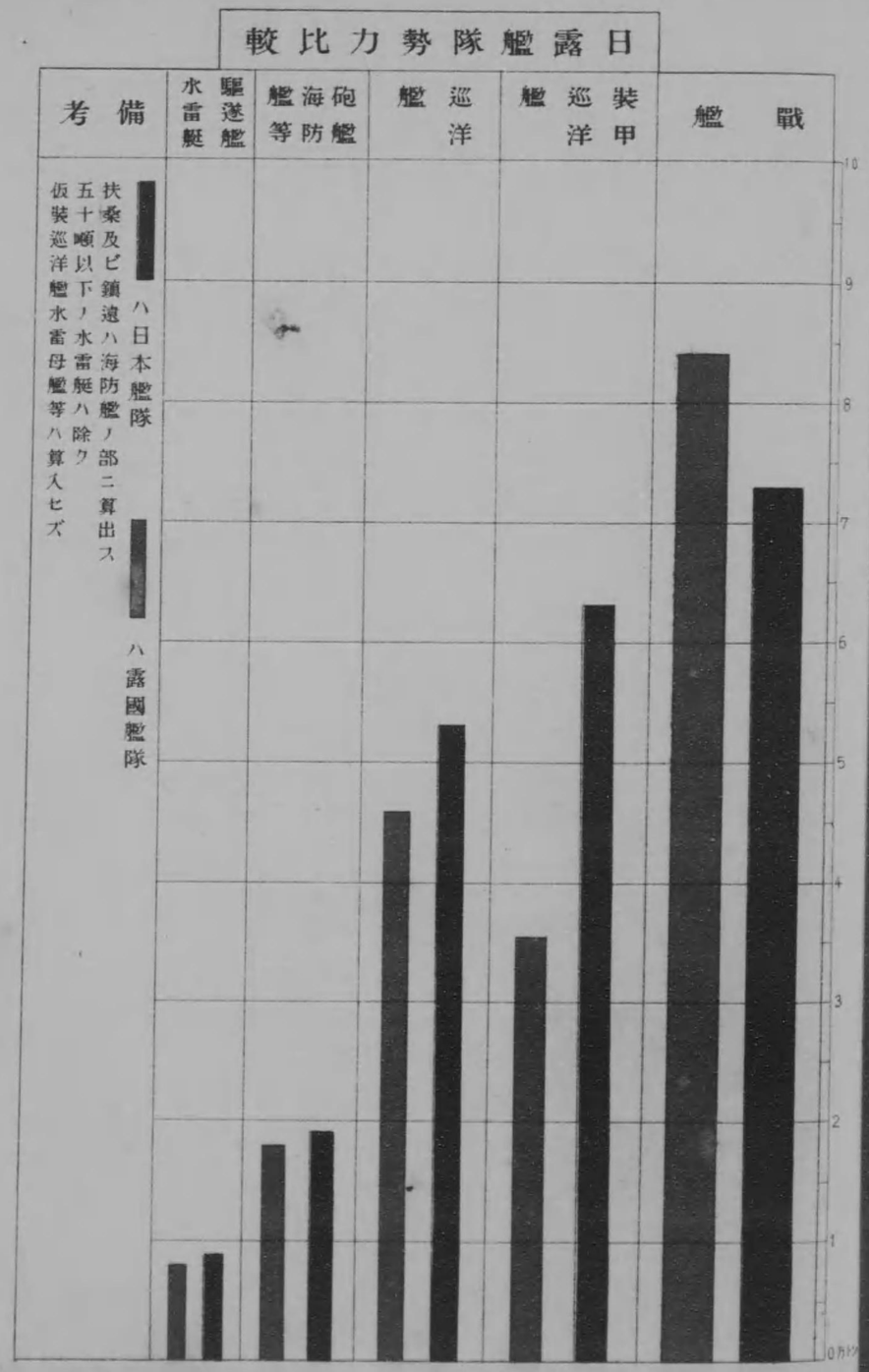
斯くて二月十日露國に對する宣戰の大詔煥發せられ、翌十一日大本營を宮中に設置せられた。

六夜廻り

帝國海軍の勢力

開戰の當初、日露兩國の海軍力を比較すると、日本の方は戰艦六隻、裝甲巡洋艦六隻、巡洋艦十七隻、海防艦、通報艦、砲艦等合して二十五隻、驅逐艦十九隻及び水雷艇八十餘隻で、其の總排水量約二十五萬五千噸。此の外新に購入したる裝甲巡洋艦「日進」、「春日」の二艦(合して一萬五千噸)は、已に新嘉坡を發して横須賀に向ひ回航中である。此等の艦艇中から、戰艦、裝甲巡洋艦及び快速巡洋艦並に驅逐艦、一等水雷艇を以て、「第一艦隊」及び「第二艦隊」を編成し、殘部を以て「第三艦隊」及び内國警務艦を編成せられた。之を陸軍に譬ふれば、「第一」、「第二艦隊」は體力、氣力共に旺盛にして、教育訓練亦完備せる現役並に豫備役の兵隊で、「第三艦隊」は後備兵、内國警務艦は國民兵の樣なものである。而して東郷中將は「第一艦隊」、上村中將は「第二艦隊」、片岡中將は「第三艦隊」の夫々司令長官に

艦隊編制



補せられ、更に「第一」「第二艦隊」を合して聯合艦隊即ち出征艦隊を組織し、東郷中將をして之が司令長官を兼攝せしめられた。「第三艦隊」も後に至り聯合艦隊に編入せしめらる)之に對し、露國の東洋艦隊は戰艦七隻、裝甲巡洋艦四隻、巡洋艦七隻、海防艦、砲艦、水雷布設艦等合して十四隻、驅逐艦二十五隻、並に水雷艇若干隻で、其の總排水量約十九萬餘噸。其の他尙東洋回航中の戰艦一隻、裝甲巡洋艦一隻、驅逐艦數隻は、既に紅海の南端まで、やつて來て居る。乃ち隻數と噸數とに於ては、日本の方が優勢であるが、戰鬪の主腦たる戰艦及び裝甲巡洋艦に於ては、彼我殆ど同勢力である。又巡洋艦以下に至りても、我は數こそ多けれ、例の滑稽艦隊の如き老骨が澤山あるに反し、敵の方は何れも有力なる新艦ばかりである。故に數字的計算を離れて、單に戰鬪力の上から觀察すると、彼我殆ど伯仲の間で、之を國技館の大相撲とすれば、慥に二重圈付の好取組である。

露國東洋艦隊の勢力

二重圈付の好取組

露國艦隊の配備

兵略家の評論

當時東洋に於ける露國の軍港は、云ふまでもなく旅順口と浦鹽斯德とであつた。時局の風雲漸く急を告ぐるや、露國は其の東洋艦隊の主力を旅順口に集め、裝甲巡洋艦三隻、巡洋艦二隻並に水雷艇若干隻を浦鹽に分駐した。凡そ己より優勢若くは同等なる敵に對し、我が勢力を分割すると云ふことは、兵戰上最も忌むべきことで、露國が艦隊の一部を浦鹽に分駐せしめた事に關しては、當時歐米の兵略家は競つて種々の評論を降した。卽ち最初旅順の敵艦隊が、我が聯合艦隊の一擊に破れて活動の氣勢を失ひ、浦鹽艦隊亦海凍の爲め行動の自由ならざるに方つては、彼等戰評家の多くは、浦鹽の如き結氷港に、比較的有力なる艦隊を分置して兵力を分割したのは、戰略上許すべからざる大失策であると非難した。然るに其の後、旅順の艦隊は益々破れて益々窘むに反し、浦鹽艦隊は解氷と共に活動を開始し、頻りに日本海方面に張梁跋扈して、北海を暴らし、元山を脅かし、遂には我が領水面たる沖ノ島附近ま

浦鹽艦隊の活動

反逆に等しき罪科

でも南下して、運送船「常陸丸」「和泉丸」「佐渡丸」等を擊沈破壞した。之に味を占めたる彼の艦隊は、更に驚くべき大猛斷を以て津輕海峽を突破し、其の快速力と航續力とを利用して、悠々東京灣外を横行し、內外の船舶をば、或は捕獲し、或は擊沈し、傍若無人の其の行爲は、帝都二百萬の住民をして、恐怖周章、顏色を失はしめた。此の時に當つて彼等評論家は、異口同音、筆を揃へて、浦鹽艦隊の英雄的冒險と其の成功とを賞揚し、同艦隊の分遣は實に戰略上、先見の明ある良策だと譽た。

已にして一時世間より難攻不落と稱へられたる旅順口要塞も、我が「第三軍」の勇猛不撓の攻擊に耐へずして遂に陷落し、東洋に雄飛したる露國艦隊の主力は、あはれ旅順口內、貝鱗の巢と化するに及んでは、彼等は更に翻然として筆鋒を改め、旅順の如き背面の防禦完全ならず、之加も、內には艦隊の修理に適する工場船渠なく、外は敵の爲に容易に封鎖せらるべき軍港に、其の艦隊を集中したるは、實に反逆に等しき罪科で

ペンにして靈あらば

あるとさへ論じたものがある。ペンにして若し靈あらば、人間なるものゝ無定見にして且つ厚顏なるに呆れたであらう。敵の艦隊に關してのみならず、我が艦隊の行動に就きても、往々我の期せずして爲した

成功は常に眞理なり

る事が、偶然良果を得たる場合などは、實情を知らぬ彼等評論家は、牽强附會、種々の難理窟をコジ付けて、我が行動を賞揚してをる。隨分讀んで脇腹を擽ぐらるゝ樣なこともある。之で見ると、人間の行爲の善惡なるものは、其の結果の良否に依つて初めて決せらるゝもので、『成功は常に眞理なり』との詞の愈々眞なるを信ぜしむると共に、人間位おせつかいなものはなく、又操觚の職に從ふ者ほど、良心の苦しいものはあるまいと思はれた。

天險地要

之を戰後の今日より見れば、當時露國艦隊の爲めに最も安全なる策は、最初から旅順を拋棄して、浦鹽斯德を固守するのである。浦鹽の形勢たるや、所謂天險地要を得たるもので、攻防の難易、旅順の比ではない。

戰略と政略

併し乍ら一歩退いて更に考ふれば、旅順の如き重要地點をば漫然拋棄するは、縱し戰略上之を必要とするも、政略上に於て許さない。苟も歐亞の大半を領有し、面積百三十五萬方里、人口一億四千萬人の大露西亞帝國ともあるものが、面積僅に五十分の一に過ぎざる我日本の爲に嚇かされ、戰はずして一軍港を打ち棄てたなぞとあつては、實に立國の名譽に關するもので、縱令ひ孔明の謀、那翁の斷ありとも、恐らくようせぬであらう。殊に其の旅順たるや、露國が世界の海洋に通ずる唯一無二の不凍港で、之を得んが爲めには、或は獨佛と聯合して我が邦を脅迫し、或は金轡を食ましめ鐵鞭を振つて、清國を瞞嚇するなど、有らゆる權謀術策とを運ぐらして、漸く手に入れたるものである。乃ち幾多の運動費と仲人料とを費やし、反間苦肉の策を弄して、纔に貰ひ得たる戀女房である。而も旅順の築城、大連の築港など、着物に帶に、當世の流行を逐うて贅を盡さしめたる今日、縱令ひ少し位、體が弱いとて、姑と中が惡

孔明の謀那翁の斷あるも

戀女房

いとて、離縁の出來ぬは人情である。況して眼中日本なく、旅順を以て難攻不落の金湯と已惚れ居たるに於ておやだ。

第三艦隊の任務

露國既に旅順を棄つる能はず、艦隊の主力を此處に集中して、遂に戰ひを開始するに至つた。帝國海軍の精粹たる聯合艦隊は、專ら此の敵に對して作戰すると同時に、自分等の屬する「第三艦隊」は、朝鮮海峽の警備を命ぜられた。即ち吾々の任務は朝鮮海峽を扼守し、一は以て浦鹽艦隊の南下を防いで、我が聯合艦隊の後方を安固にし、一は以て聯合艦隊に打ち洩らされたる旅順艦隊の落武者が、浦鹽に逃走するのを打ち止める役である。惡く言はゞ朝鮮海峽の番人に過ぎないので、頗る不滿ではあるが、內地の警備艦や、海兵團に殘つて居る人に較べると、軍事郵便の通用する丈でも、有難く思はねばならぬなどゝ、强て自ら慰めた。扨て番人の中でも水雷艇は、殊に下等な夜廻りといふ役である。

夜廻はり

朝鮮海峽一名對馬水道といふのは、我が九州と朝鮮との間に夾まれ

東水道
西水道

たる海峽であつて、其の中間には壹岐、對馬の二大島が橫つて居る。此の兩島間に在る約二十海里の海峽をば東水道と稱へ、對馬と朝鮮絕影島との間なる、約二十五海里の海峽をば西水道と稱へて居る。我が「第三艦隊」の主力は對州竹敷を、又其の支隊は朝鮮南岸をば、夫々根據地とし、晝は軍艦を以て、夜は水雷艇を以て、嚴重周密に東西兩水道を警戒した。六花衣に白き雪の日も。怒濤船を呑む風の夜も。一切滅切休みなしである。元來冬の朝鮮海峽は風が强いのと、寒さが嚴しいのとで、平常でさへも水雷艇乘りの屢々泣かされる處である。殊に一二月の頃には、海の靜かなことは極めて稀である。小雪交ぢりの寒風が、潮を捲き枯木を鳴らして吹き荒む時には、鳥さへ翼を收めて梢を離れない。こんな晚に、敵の來る當てもないのに、波を浴びつゝ哨艇に出る時は、つく〳〵泣きたくなる。世には國難に乘じて不義の利欲を貪り、今頃は玉樓錦閨、紅夢暖かなる奴も尠なからぬにと思ふと、凡夫の悲しさ、

一切滅切休みなし

つく〳〵泣きたくなる

時には腹も立つ。

下には毛織の襯衣の重ね着に、眞綿の胴衣、上には防寒外套に雨合羽を重ね、革の手袋を二重には、め、毛絲の靴下をダブルには、いて、當直に立つ。狹くて動搖の烈しい水雷艇のことゝて、甲板上の運動も出來ず、四月の御釋迦樣然として、司令塔の上に衝つ立つた儘、風には吹き暴され、潮水は浴び放第と云ふので、三十分も經たぬうち、早や合羽の裏まで、潮水が浸み透る。手足は次第に凍へて、初は冷たく、次は痛く、遂には感覺が無くなつて、物を握ることさへ出來ない。雨腕で柱を抱へて僅に身を支へて居る。夫も月夜などは、まだ幾等か樂であるが、鼻摘まれても判らぬ樣な眞の闇夜に、前續艇の艇尾にとぼ、ず唯一の螢火を目標とし、衝突せぬ樣、見失はぬ樣、常に適當の距離を保つて行動する心配は、迚も局外者の想像だも及ばぬ所である。なぜ人間にも猫や鼠の樣に、晝夜兼用の眼を付けて置かなかつたかと、造物者までが恨めしくなる。

四月の御釋迦樣

造物者までが恨めしい

殊に開戰の當初は誰しも、敵が今にも來る樣に思ひ、馬鹿正直に總員徹夜勤務をやつたので、明け方になると、眠さと、寒さと、疲勞との包圍攻擊を受け、動ともすると海の中へ轉げ込む心配がある。何しろ水雷艇の甲板と云へば、廣さ僅に三尺に滿たぬ通行路に、バケツや水桶などが、所狹きまでに置いてあるので、迂つかりすると躓いて舷外に拋り出されたり、動搖の爲めゆり落される樣な事は、平時と雖も屢々ある。而かも舷外一歩を踏み外せば、下は怒濤洶湧、奈落の地獄であるから、氣に一寸の油斷も出來ない。

寒さと眠さと疲勞との包圍攻擊

下は奈落の地獄

永き冬の夜をガブラれ通して、身體綿の如く疲れたる時、東天漸く白んで、曉霧に浮ぶ對州の山を見るときは、實に蘇生の思ひがする。『曉ばかり憂きものはなし』と云つた昔の歌人を、一晩なりと乘せてやりたい。錨を根據地に投じて手足を暖め、濡れた衣服を着換へ、イザ一休みと思ふ矢先き、情なや『其の艇は通信艇として直に○○に向ひ出港

一晩なりと乘せてやりたい

すべし』との命令！　嗟吁戰爭なるものは斯くまで苦しき、而かも斯くまでつまらぬものとは思はなかつた。他人の功名手柄を聞くばかりで、こちらは緣の下の力持ち同樣。是が二三ヶ月も續けば迚も命が續かない。死は素より期する處だが、敵の姿も見ずして病氣に殪れるのは殘念である。こんな事なら水雷艇なんかに乘るのではなかつたにと、苦しさの餘りついつい愚痴も出る。併し陸軍には馬や車の代りをする輜重輸卒と云ふものもある。之に比ぶれば吾々の仕事はまだ幾分か上等ぢや。已に陛下に捧げた此の體、縱令病に殪るとも……

緣の下の力持

陛下に捧げた此の體

『直に出港用意』『ケーブル縮め！』

何の不平も言はず、嫌な顏もせず、怡々として維命維從ひ、ケップスタンに就いて錨を捲く水兵達の擧動を見ては、內顧みて忸怩たらざるを得ない。上に叡聖文武の聖天子を戴き、下に忠誠勇武の此の良兵士を率ゆ。吾人亦多幸なりと謂つべしだ。

吾人亦多幸なり

雪山起伏し白馬奔逸するが如き荒波を蹴り、通信艇として支隊所在地に達すると、當隊に隨伴しろとの命令！　僅に三海里か四海里の微速力で、終日滑稽艦隊の御供をする。一體、船といふものは適當の速力を以て駛しれば、幾らか動搖も減ずるが、此の荒海に三四海里の緩速力では溜つたものでない。艇は將に轉覆せんばかりに動搖する。飯も炊けねば茶も沸かせない。嗚呼終夜眠らず、終日食はず、以て思へど矢張り苦しい！　更めて孔子の敎を受けんかなぢや。

御供はつらい

七悲劇

相變はらず の夜廻り勤務

意地穢ない動物

しほらしい願望

開戰以來早や一月あまり、此の間自分の艇隊は、或は人里遠き朝鮮の濱邊や、或は猿聲繁き對州の片田舎を根據地として、相變らず面白くもなき夜廻り勤務を繼續して居る。併し追々經驗のつむに從ひ、緩急に應ずる呼吸を覺へたので、今は徒に徹夜の苦しみに泣く樣な愚をやらない。爲に身體の苦痛は大に輕減し、一月たつても生命に別條なきのみか、風一つ引かなつかた。元來人間なるものは極めて意地穢い、望蜀の欲の深い動物で、最初は先づ口腹の欲を滿たす。次には心情の愉樂を求める。最後にはヤレ華族になりたいとか、ヤレ自働車に乘りたい、とか、下らぬ虛榮に向つて憧憬するのが普通である。我々も初の間は隔晩の勤務が、せめて三晩交代にでもなれば、さぞ樂であらうなぞと、極めてしほらしい願望であつたのだが、次第に肉體上の苦痛が減ずる

長安洛陽花の都

唯もう海軍大勝利

と共に、朝鮮の鼻垂れ小僧や、シャグマ頭のお花さんばかり相手では、何だか物足らない樣な心地がして、生糧品の積み込みや、炭水の補充を口實として、成るべく屢々竹敷に赴くべく企てた。曾ては流人の配處の如く思ひし竹敷も、今では長安洛陽花の都の思ひがして來た。實にや、屋島の濱を追ひ落されて、西海の波に漂ひたる平家の上臈が、『波枕袖の沫にくらぶれば伏家の床も戀しかりける』とか何とか歎きたるも道理である。

自分達が伏弩待矣敵不來を喞ちつゝ、朝鮮の海濱に海參を拾ひ、對州の田舎に薯を嚙つて居る間に、我が聯合艦隊は連續、旅順口を襲うて頻りに大捷を博し、勇壯なる港口閉塞も決行された。舷々相摩する驅逐艦の激戰も行はれた。聯合艦隊の名は今や海の內外に鳴り響いて、國民は唯もう海軍大勝利の聲に醉うて仕舞つて居る。毎日の新聞は海戰に關する記事を以て、殆ど全紙を埋めんばかりである。就中、閉塞行

閉塞隊員にあらずんば

動は最も國民の御氣に叶つたと見えて、閉塞隊員の一笑一咳、片言隻語、悉く是れ新聞記事の材料となる。閉塞隊員にあらずんば、眞の軍人にあらずと云ふ有樣である。東洋のネルソンたる東郷司令長官と、軍神廣瀨中佐との名は、新聞の各ページに數へ切れない程載つて居る。

牌肉の歎

敢て他人の功名を羨む譯ではないが、同じ軍職に在る青年血氣の我々、日夕僚友の偉勳を樹つるを耳にしては、滿身の血沸き肉躍つて、實に牌肉の歎に堪へざるを得ない。或は直接所轄長官に迫り、或は書を知己の上官に送つて、あはれ一生の慈悲に、今の不運なる境遇より、救ひ上げ給へと歎願に及んだ。獨り吾々ばかりでない。下士卒に至るまで心は同じ武士の意氣。入り替はり、立ち替はり、どうかして吳れと願つて來る。無下に追ひ歸すことも可愛想なので、

心は同じ武士の意氣

聯合艦隊の乘員も吾々も、任務の上に於て少しも輕重はありはしない。此の先き未だ永い戰爭に、そんなに死を急ぐにも及ぶまい。今

戰激の隊逐驅

口と腹とは正反對

本心暴露

に浦鹽艦隊と大決戰を試みる機會もあらうから、さう失望したものでもない。そんなに皆が出て仕舞つたら、本艇ばかりか、朝鮮海峽を守るものは、無くなつて仕まうぢやないか。

と、今の今まで人に諭された身が、忽ち人を諭す身と早替はりをする。恰も道樂親爺が妾を次の間へ忍ばせ置きながら、放蕩息子に意見をする樣なもので、口と腹とは正反對である。『一誠』を以て本領と爲すべき軍人の言としては、誠に不都合千萬と云はねばならぬ。併し朝に廢娼論を唱へて、夕に待合の門を潜る倫理學者や、口に佛の敎を說きながら、横目で富家の寡婦を物色する生臭坊主もある世の中とて、我々のは、まだ頗る罪が輕い方である。

斯んな心にもなき理否を說いて宥めると、中には『私一人丈でもどうかして呉れ』なぞと、我儘を云ふ者がある。餘りしつこく責められると、遂に本心を暴露して、『そんな勝手な願が聽ける樣なら、オレだつ

新聞記事と士氣

て今までこんな所に愚圖々々しちや居ないんだ』と、どなり付ける。二三日經つと又やつて來る。此の頃、竹敷と佐世保との間の通信船は、三日おき位であつたが、新聞の來た日には屹度歎願者が多い。恐らく新聞の記事の爲めに、比較的單純な彼等の頭腦を、刺激せられて堪へられなくなるのであらう。

或る日竊に例の歎願書を認めて居ると、士官室の階段を降りて來る者がある。見付けられては一大事と、書き掛けの手紙を、狽てゝテーブルの引出へ押し込むと同時に、一人の水兵が片手に一通の手紙を握つて、鞠躬如として入つて來た。

『軍事郵便なら先任下士の處で纏めて出せ！』

と云ふと、彼は頗る躊躇しながら恐る〳〵、

『豫てよりの御訓戒は充分心得て居りまするが、今日國元からこんな手紙が參りまして、誠に殘念で……どうか……』

國元から手紙

數行の紅涙

と、手紙を自分の前へ差し出すと同時に、彼の眼からは數行の紅涙がはら〳〵落ちた。自分は親の病氣でもかと思ひながら、手紙を開いて讀んで見た。

艇中第一の良水兵

此の水兵は自分の艇の乘員中最も勤勉家で又最も常識に富んだ良水兵であつた。生國は○○の田舍とかで、祖父の代までは村の名主をも勤めた名家であつたのだが、父の代に至りて家運傾き、爲めに彼は幼少より、野に草を刈り、山に牛を追ひ、小學教育さへ踏んで居ない。從つて文字の智識は絶無であるが、頭腦の明敏で記憶力の強いことは、實に驚くべき程である。乘員の最も記憶に苦しむ發光信號の如きも、彼は艇中第一の上手であつた。平素己の無學を歎く彼は、同僚が上陸して酒を飲み、晝寢に耽る間にも、獨り艇に殘りて孜々として讀書算術等を勉强して居た。而已ならず、月々貰ふ僅かな俸給の殆ど全部を割いて、唯一人の妹を女學校に入れた。彼の女は今や學校を卒業して、郷里

の小學校に教鞭を執りつゝ、母亡き父の看護に務めて居るとのことである。斯くの如く彼は其の技能に於ても、人物に於ても、下士として毫も恥づる處はないのであるが、海軍下士卒進級條例に、卒より下士に進むるには普通學の試驗を要す、と云ふ一片の條文にせかれて、彼の袖にはまだ櫻の徽章を付けることが出來ないのである。

一片の條文にせかれて

手紙は二卷になつて居て、其の一は御家流の男文字で、六かしき字には振り假名が付いて居る。

父の手紙

一筆啓上致し候。其許儀益々御壯健日夜軍務に勉勵の由目出度く存候。當方何れも別狀無之候間安心成さるべく候。申す迄もなければ一家の事など毛頭心に懸けず、大君の爲め充分忠勤を勵み、家名を揚ぐる事肝要に御座候。平時と異なり勤務も烈しかるべく、折角身の養生專一と存候以上。

文は誠に簡單であるが、短い中にも無量の慈愛と訓戒とが籠つて見える。

妹の手紙

紀念の櫻

る。他の一通は女文字で、當世はやりの小野流とかの筆勢美はしく、而も殆んど總假名で、

一筆しめし上る。東の山の雪溶けて庭の紅梅に鶯來鳴く頃と相成り候處、御兄上様には何の御變りもあらせられず、勇ましき軍の務めに御勉勵のよし、誠に何より御目出度存じ上げ候。次に當地に於ても父上様はじめ、親族の方々も皆々様至極御達者に被爲渡、尙ほ又私方は出征軍人の留守宅として、村の方々より厚き御同情と御慰問とを受け、最と心安く相暮らし居り候。間憚りながら御安心被降度候。先年御兄上様が始めて佐世保海兵團へ御入團遊ばさるゝ節、紀念の爲めとて植ゑ置かれし庭の山櫻、今年始めて蕾を持ち、父上様にはいと目出度きしるしと、殊の外よろこばれ居り候。扨て先達以來海軍度々の大勝利、誠に目も覺むる樣な御いさほし、私達まで海軍々人の家族たる御蔭を以て鼻が高き樣な心地致し候。殊に閉塞

我が村の廣瀬中佐

隊とかは最も危ふき決死の仕事にて、外國にも是まであまりたゞし、なき事とか承はり及び候。川向ふの○吉様は其の閉塞隊とかに參られ、大邊の御手柄を立てられしとかにて、我が村の廣瀬中佐との評判に有之候。一昨日も大勝利の祝賀會有之候節、○吉様の兄様が今日は○吉の祝ひでわゝしが第一の客だからとて、御酒の機嫌で御老人達の上座に就かれしを、昔氣質の御老人方は中々承知せられず、村長様の仲裁にてやつと相收まりしとか、御歸宅後父上様には昔の小作人の倅風情に馬鹿にされては、御先祖に對して相濟まぬなぞと殘念がられ候。

先祖に對して相濟まぬ

封入致したる御守り札は鎭守八幡様の勝軍護身符にて、神主様より頂きたるものに御座候。御守り袋は腹卷と一緒に別に小包便を以て御送り申上候。腹卷は誠に不出來には候へ共、父上様にも御手傳ひ被降、私共二人の眞心の籠れるものに候へば、何卒御守り札と共

私の働に不滿足

に御肌に御着け被降度候。陣中萬事御不自由の御事と存し、何か御好の品物御送り致し度くと、父上様とも御相談致し候ひしも、何分田舍の事とて之と申すものも御座なく、就ては御所望の御品有之候節は御遠慮なく御申越被降度候。（下略）

彼は涙を拭ひながら、

『父は是迄年始狀の外は自分で手紙を書いたことなく、何時も妹に代筆をさすのですのに、今度に限り斯樣な手紙をよこすのは、屹度私の働を不滿足に思うて居るからでしよう。決して艇長の御名を汚す樣なことは致しませんから、是非どうか旅順の方へやつて頂き度うございます。親にまで耻をかゝす樣では誠に殘念で……』

と、手を合はして拜まんばかりである。平素孝心深き彼に取りては嘸情なく思うであらう。自分は彼に對して滿腔の同情を寄せるを禁じ得ない。彼は如何なる困難に遭ふとも、決して自己と、選拔者との名を

平々凡々眇たる一艇長

辱むる者でないことは、自分も承知して居る。ならう事なら其の希望を満たしてやりたいのは山々であるが、如何せん自分の身分は、平々凡々、眇たる一艇長に過ぎないので、未だ直に彼の願を叶へてやる丈の力がないのである。懇々彼を慰めて時機を待つべく諭した。

急病

或る夜例の如く西水道の夜廻りをやつて居ると、彼○○水兵は遽かに腹痛がするとて床に就いた。痛みは刻々烈しくなつて、苦悶の狀は殆ど見るに忍びない。診察を受けるにも軍醫は居らず、然も夜中、竹敷に歸ることは、敵襲と間違へられる虞があるので、嚴禁せられて居る。

回復は覺束ない

艇に備へ付けの醫療箱から、何とか錠と云ふ藥を出して飲ましたが、素より斯かる大病に利く筈もなく、夜の明くるのを待ち兼ねて竹敷に歸り、直ちに病院へ送つた。盲腸炎と腹膜炎との併發とかで、稍や手後れの爲め、回復は迚も覺束ないとの診斷である。其の晩は自分の艇は非番で、休養の筈であるから、充分介抱も仕てやらうと思つたに、浦鹽艦隊

出艇前に今一目

が出港したとかで、俄に臨時出艇を命ぜられた。軍醫の言に依ると、多分明朝までは保つまいとの事である。出艇前に今一目逢はんものと、自分は病院に彼を見舞ふた。昨日までも艇内第一の働者たりし彼は、今や顏色憔悴として苦痛を訴へる力さへなきものゝ如く、息も微に、眼は早どんよりと曇つて居る。僅か一日の間に斯くも衰へるものかと思へば、苦惱の程も察せられる。枕元に置かれたる藥瓶の名札には、まだ一點の汚染さへ付かぬに、病の主は早や曉の星の如く、回復の光も消へんとして居る。

口には夫と言はれど

口には夫と言はれども、妹のことも思うであらう。耳に口寄せ何か望は會いたいであらう、妹のことも思うであらう。耳に口寄せ何か望はないかと問へば、光なき眼を僅に開いて、力なき手を微に動かした。熱き握手を與へると、微かに笑みを含んで再び眼を閉ぢた。せめて臨終の水を取らしむる爲め、日頃親しき友の一二人をば殘し置きたかつたが、私情の爲めに公務を捨つる譯にはゆかず、將に死なんとする戰友を

「殘念」の一語を殘して

悲劇の主より

ば、獨り寂しき病床に殘して夕刻、哨艇に出でた。翌朝萬一の望みを屬しつゝ竹敷に歸るや否や、直に人を病院に馳た。彼は今朝三時頃『殘念』の一語を名殘として、空しく此世を去つたとのことである。豫て期したる事とは云へ、尙ほ止め難き哀悼の涙！。植ゑ置きしと云ふ故郷の櫻は未だ散り果てぬであらうに!!　嗚呼彼や生きて赫々の勳功を樹つるの期なかりしも、必ずや死して護國の神となつたであらう。其後半月あまり經つて、自分の許に一通の手紙が達した。

卒爾ながら一筆申上候。妾儀は○女と申す賤の女にて故○○の妹に有之候。兄在世の砌は厚き御眷顧を垂れ賜はり、且つ病死の節は軍務御多忙の際にも拘はらせられず、皆樣方の一方ならぬ御世話樣に相成り、尙ほ其上に多分の御香奠まで御惠み被下、何と御禮の申上樣も無之候。妾父事僅かに數日の煩ひにて本月初め死去致し、まだ三七日もたゝぬ間に又唯一人の兄に相別れ候、ことゝて、兄病死の

夢かとばかり

せめて戰死なりと

御知らせに接し候時は、唯夢かとばかりに驚き申、甲斐なき女の身の如何はせんと獨り途方に呉れ申候ひしも、御情け深き御言葉と村人の懇なる助けとにより、漸く心ばかりの葬儀を相營み申候。實は亡父の遺言として、戰爭終り兄の凱旋致すまでは、決して自分の死亡を知らすことならぬとの言付けに有之候ひし故、未だ夫さへ通知致さゞりしに、先きの世にて若し廻り逢ひもせば、嘸かし互に打ち驚くことゝ存じ候。父こそは老年なれば致方も無之候得共、せめて兄には戰死なりと致させたかりしと、是れのみは返す〳〵も殘念と存候。わづか一月に滿たぬ間に、柱とよたる父に別れ杖と賴む兄を失ひ、唯一人浮世に取り殘されたる妾の身、舵を絶へたる捨小舟にも尙ほまさり、何れを當てとするよしあしも定め兼ねいとゞ行末の心細くて一時は父兄の跡を追はんかとも存じ候ひしも、情ある人々の慰めにより、是よりは看護婦なりと志願致し、亡き兄に代はりて御國の

浮世の波風心して吹け

御爲め、かよわき力を盡さんものと漸く心を決め申候。（下略）

何たる不幸の少女であらう。聞くも涙の種である。己が望みを遂げずして空しく逝きし者、素より不運である。併しながら波風荒き此の浮世に、唯一人殘されたる少女は尙ほ更に哀れである。嗚呼舵を絶へたる捨小舟、浮世の波風心して吹け!!!

八前進

花も開かず芽もふかず

開戰以來早や二月、頻つべたを搖り取る如き、寒い、冷たい、朝鮮風も何時しか和らいで、山は若葉に薫り、海は霞に匂ふ春のなかばとなつた。桃、櫻谷間の木には花は咲けども、武運拙き自分等の身には、花も開かず、芽もふかず、依然として朝鮮海峽の夜廻り勤務を繰り返して居る。旅順方面に在る戰友の赫々たる武勳を聞く毎に、腕鳴り氣焦立ち、弓矢の神も聞へませぬと、將士共に暗涙を呑んで、我が身の不運を恨むこと、日又夜。天上の月は冴ゆるも、胸中の悶々は更に霽らす由もない。

胸中の悶々

かくて四月の初め頃であつたと思ふ。聯合艦隊司令長官より、決死隊募集の令達があつた。或は旅順へ突擊する陸戰隊ぢやとも云ふ。或は第三回の閉塞隊ぢやとも云ふ。何か知らぬが此の機を逸してはと、一考の猶豫もなく、艇員殆ど全部其の募りに應じた。自ら望んで軍

此の機を逸しては

籍に投じたる將校は別とし、國民の義務として兵役に服したる下士卒に至りては、後顧の有無に關して愼重の考慮を必要とする。斯かる際には動もすれば附和雷同の虞があるので、一人々々士官室に呼び寄せ、家庭の狀況、係累の多少などを、取り調べ、聞き糾し、苟も眷族扶養の義務ある者に向つては、懇々自重すべきを說き聞かしたが、何れも血氣滿々、意氣鬱勃の若武者ばかりとて、頑として決して聞き入れない。

附和雷同の虞

今日は採用の通知が來るか、明日は呼び出しの命令が來るかと、一同鶴首して待つて居た。氣の早い連中は既に遺言狀まで認めたものもある。然るに其の後、一週間經つても、十日過ぎても、何等の通知も命令も來ない。扨ては落第かと思へば、大なる恥辱を與へられた樣な感がして、殘念で殘念でたまらない。殊に何艦からは某が採用せられた、何艦からは某が行くと云ふ樣なことを耳にすると、益々以て癪に障はる。他の艇隊を問ひ合はすと、何處も同じ落第の不平黨ばかり、『一

扨ては落第か

體我々は決死隊に採用せらるゝ丈の資格が無いのであるか』と、司令に對し强硬なる質問に及んだものもある。其のうち『驅逐艦、水雷艇などは、元來が既に決死的のものであるから、此の度の決死隊には一切採用しない御主意ぢや』と云ふことがわかつたので、聊か蟲が收まつた。夫にしても、何時までも朝鮮海峽の夜廻りばかりやらされるのは、あまり殘酷であると、恨めしくも思つた。

强硬なる質問

あまり殘酷

尋で四月の十三日には、敵の戰艦『ペトロパウロスク』が我が機械水雷に觸れて沈沒し、マカロフ司令長官亦戰死すとの公報に接した。もう斯うなると、矢も楯も溜まらない。此の上こんな所で、ぐづ〳〵して居つては、敵の軍艦は全滅して仕舞ふ。折角千歲一遇とも云ふべき此の好機に生れながら、敵の姿も見ずして戰爭が終る樣なことでもあれば、誠に終生の恨事である。何が何でも、旅順の方へやつて貰はなければ蟲が承知しない。こんな事なら一そ軍人なんか止めた方がましだな

矢も楯も溜まらない

終生の恨事

命令來る！

どゝ、躍氣になつて力むものもあつた。士氣は今や絶頂に達して居る。

既にして四月の十六日、東郷長官から片岡長官に向つて命令が來た。曰く。

『第三艦隊は準備整ひ次第、聯合艦隊の根據地たる○○灣に來集せよ』

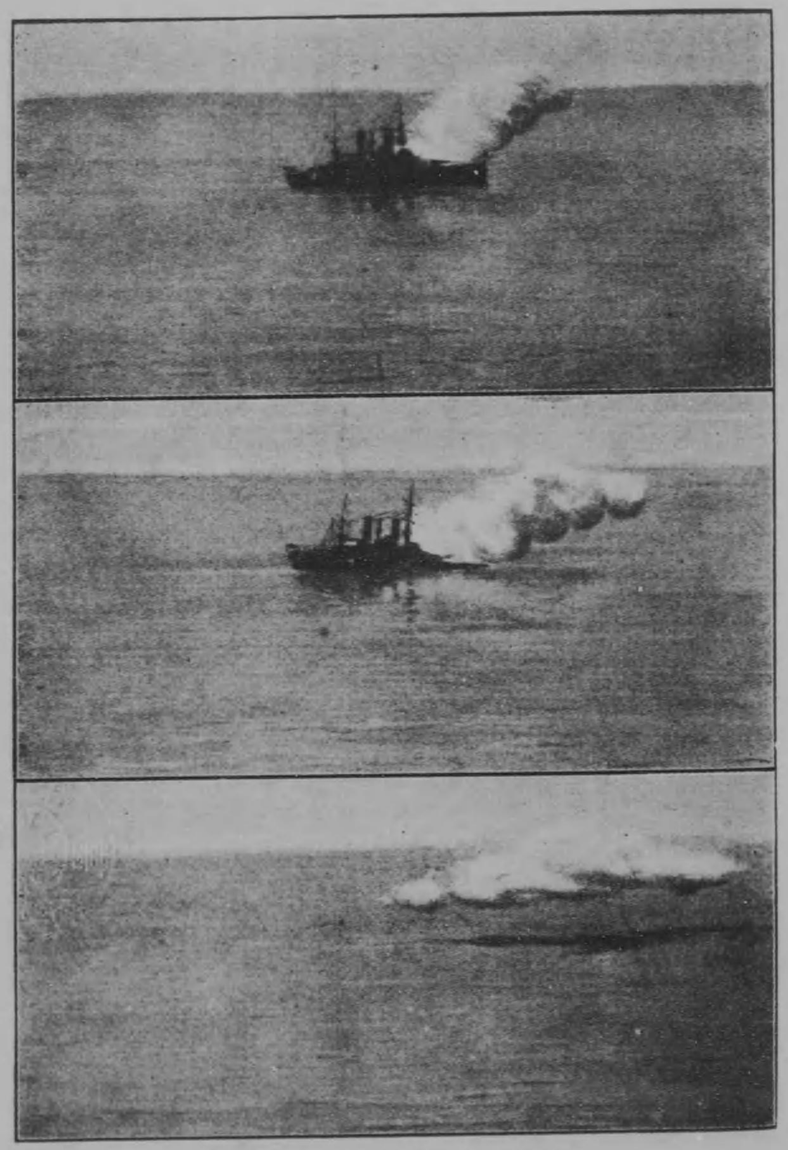
命令の傳達を受けたる艇隊乘員の面は忽ち嬉色に輝き、無心の機關まで運轉が輕くなつた樣に思はれた。當時朝鮮の南岸を根據地とし

禪の洗濯日

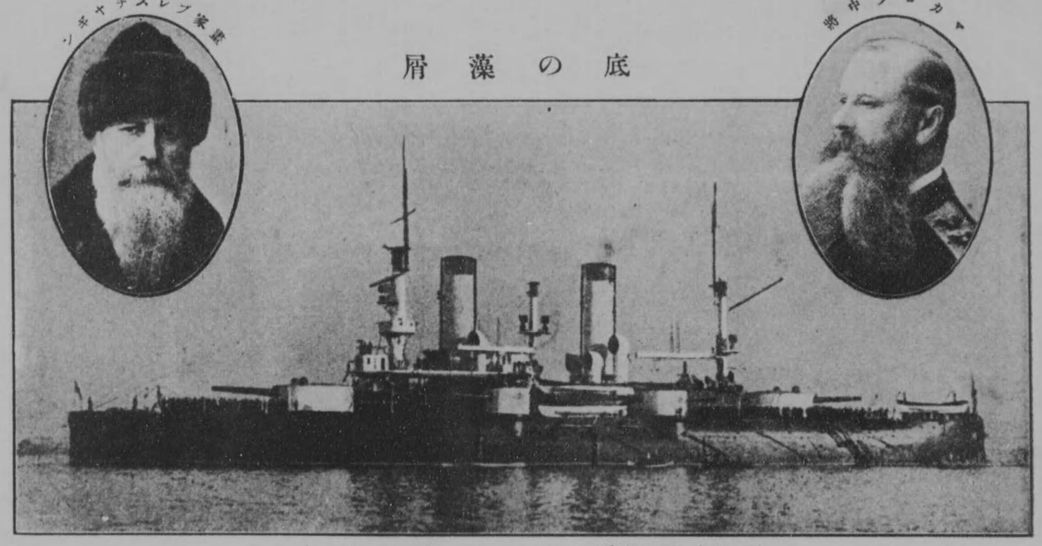
たる自分等の艇隊は、前進準備の爲め直に竹敷に回航した。偶々此の日は風波頗る荒く、怒濤澎湃として激湍艇上に溢れ、所謂禪の洗濯日であつた。平常ならば隨分苦しい航海であるが、今日に限りて却つて氣持が宜い。人間程勝手な者はないと思つた。竹敷に於て炭水糧食を滿載し、一切の戰備を完整して、四月二十日、後に殘る人々の羨望を受

愈々前進

けつゝ、意氣昂然、艦隊根據地に向つて出發した。例に依つて友隊からは、『武運長久を祈る』とか、『赫々たる勳功を立てられんことを望む』



沈爆の「ペトロパブロスク」



露國戰艦「ペトロパウロスク」

遙かに弔ふ碧波亭の跡

黎岩磊々赭土赤々

山はスコ禿げ水濁る

とか、中には『少しは殘し置かれんことを望む』と云ふ樣な信號が送られた。

朝鮮南岸に點在せる幾多の禿島巖嶼の間を縫うて、此の夜所安島に假泊した。翌早朝錨を拔き、慶長の其の昔、我が水軍が、韓將李舜臣の爲めに全滅せられたと稱ふる、碧波亭の跡をば遠く右舷に弔ひつゝ、珍島を廻つて、潮流矢の如き長竹水道を過ぐれば、此處は朝鮮の瀨戸內海とも稱すべき場所である。大小無數の島嶼は碁布羅列して、恰も我等の行を迎ふが如く、送るが如く、隱顯出沒、應接に暇がない。併し乍ら何れの島も、何れの山も、見渡す限り唯是れ黎岩磊々、赭土赤々たりで、殆んど綠影を認めない。『人間到る處青山あり』とは、朝鮮に於てのみは除外例である。清狂とかいふ和尙さんも詩を作るに、朝鮮の地勢までは調査が屆かなかつたものと見える。朝鮮に於は『山は青々水淸し』でなくて、『山はスコ禿げ水濁る』である。白砂青松、碧水に映ずるなど

之でも大韓國

の風景は、到底朝鮮に於ては見ることが出來ない。豚小屋かと思はれる樣な、土牆萱葺きの穢ない民家が、禿山の麓に土饅頭を伏せた如く、累々として連なるを見ては、是でも二十世紀の活世界に立ちて、大韓國で候と意張つて居るのが片腹痛い感じがする。夏冬ぶつ通しの白衣に、狸の睾丸然たるズダ袋を帶に搖ら下げ、二三尺もある長煙管を斜に咬へ、豚の如く泰然として、日向ぼつこをやつて居る韓民は、良く言へば

太平無欲の民

誠に太平無欲の民、惡く言へば眞に懶惰亡國の民である。こんな國と、こんな人間とを、近所に持つ我が日本國は、隨分厄介なもので、何時になつても、心配の絶へる期はあるまいと思はれた。

洵に黃海の名に反ずず

八口浦を右に見て朝鮮西岸に出で、針路を正北に取りて進めば、海水の泥色次第に濃く、漫々たる濁潮、舷を穢して、洵に黃海の名に反かない。激湍たる細波を蹴つて、子午線上を北航すること終日。左は渺漫たる大海、右は逶迤たる韓山。水濁れりと雖も海鳥閑かに眠り。山

ノみりと春の海

禿げたりと雖も、錦霞紫に匂ふて居る。戰場に急ぐ我等が身も、清暖溶くるが如き此の春光に浴しては、いつしか氣も和らぎて、血に渴した る心の、坐に恥しき思がした。

明くれば四月二十二日

此の夜、風は眠つて、海平かに、空は霽れて月明らかであつた。一切の燈火を滅して萬一の敵襲を警めつゝ、金波を碎いて終夜航海を繼續した。明くれば四月二十二日、曉風淡霧を拂へば、一簇の濃煙、鬱乎として迥かに前方の天を焦がすを見た。此處ぞ卽ち我が聯合艦隊の前進根據地と知られた。

心中の不安

無事とは知れど顏見るまでは胸騷ぐとは、子を思ふ親心。我等は敢て公明なる東鄕長官の公報を疑ふとにはあらねども、開戰以來、敵艦隊の損害大なるに比し、我が損害の輕微なるを聞きては、心中多少の不安の念はあつた。敵にあれ程の損害を與へながら、我が艦隊ばかり獨り無事なる謂れなし。必ずや一隻や二隻は、檣を折られ、煙突を碎かれ

杞憂に屬す

たるものもあるであらう。事によると急所を擊たれて、戰鬪力を失つて居るものも、あるかも知れぬと思つて居た。然るに今眼前に現はる、我が軍艦の一隻又一隻。見渡す限り何れも姿容凛々として、何等の異狀も、何等の變化も無きを見ては、歡喜極まつて萬歲を唱うるを禁じ得なかつた。

帝國聯合艦隊根據地

こゝ朝鮮北西岸の一良灣たる、帝國聯合艦隊根據地の奥深く、自分等の艇隊は錨を投じた。港の中央には東鄕長官の旗艦「三笠」を始めとし、戰艦、巡洋艦等十四五隻の艤艦が、雄姿堂々、軸艫相啣み、儼然として碇泊してゐる。其の北側には數十隻の驅逐艦、水雷艇が、恰も、串團子を並べた如く井然として配列し、軍艦錨地の奥には、鼠色に塗りたる異樣の商船十隻ばかり、錯然として投錨して居る。是ぞ近日決行せらるべき、第三回閉塞船だと云ふことである。晝夜を分たず各艦の煙突より吐き出す煤煙は、一團の黑雲となつて、天を蔽ひ海にたなびき、各艦艇の間を

異樣の商船

活氣滿々

往來する幾多の汽艇端舟は、旁午駱驛、織るが如く、活氣滿々、生氣潑々。是迄「平遠」、「磐城」などの老耄艦隊の御供ばかり爲したる自分等に取りては誠に心强い思がした。

勿體なくて罰が中る

艦隊根據地に着してより早や一週間あまり、未だ何等の任務をも命ぜられない。唯毎日寄贈煙草を燻べながら、馬鹿話や碁に日を暮らして居る。潮水を浴びながら晝夜ぶつ通しの、哨戒勤務に泣かされて來た身には、勿體なくて罰が中りさうである。

太りつこはないよ

K『一體オレ等をこんなに遊ばして置いて、どうする積りなんだらう？』

M『ナーニ、心配するには及ばないさ。どうせつぶしにする鷄だもの、ウンと甘いものを食はして、樂をさして、肥やして置くんさ。ハ、、、』

T『でも、此頃の樣に毎日〳〵、まづいね。是ぢや、幾等呑氣に休養したつて、痩せる一方で太りつこはないさ。此處へ來てから早や一週間になるが、生糧品と云つたら、玉葱

とジャガ州との外、柴葉一筋口へ入りやしないんだもの。』

『まア、新に入港した運送船へ行つて見い！。艦載水雷艇や小蒸汽で、競走的にやつて來た大艦の糧食員が、我れ先きにと手當り次第に、糧食を分捕る有樣は、まるで餓鬼の奪ひ合ひだね。水雷艇などの小ぼけなボート位で、エッチラ、オッチラ、やつて行つたとて、迚も大根の一本も得られる譯のものぢやないさ。今少し取締の途を講じて貰はなくちや、水雷艇などは干上がつて仕舞ふよ。』

餓鬼の奪ひ合ひ

『帝國の軍人ともあるものが、意地穢い食物のことなぞて、くづ〳〵コボすなよ。朝鮮海峽で潮水浴びて居つた時のことを思や、贅澤は言はれない譯ぢやないか。夫にしても、戰爭は良い船に乘つて居るに限るね。平素は思ひ切り呑氣に遊んで居て、然かも戰鬪の甘い汁は、何時でも眞つ先きに吸ふのだから……論功行賞の標準を、若し單に勳勞の難易と、苦痛の多少とに依つて定むると假定すりや、ボロ船

贅澤は言はれない

論功行賞

に乘つて居る者こそ、却つて金鵄勳章の價値があるね。』

『論功行賞とこそ云へ、日清戰爭には隨分金鵄勳章を亂發したもので、貰つたのが名譽でなく、貰はぬのが不名譽と云ふ有樣だつたが、今度はどんなものかね。一體、金鵄勳章の如き武功章に、等級を區別したり、又等級に依つて年金に差等を附するなどは、あまり感心した話ぢやないと思ふね。而かも其の等級なるものが、武功の大小に依つて區別するのでなく、官等の高下に從うて區別するなどは、益々以て考へ物だね。だから見ろ！、下士卒は如何なる大功偉勳を樹てゝも、功六級以上の勳章を貰ふことの出來ぬに反し、將官は左程手柄が無くても、必ず三級以上の勳章が戴けることに定つて居る。殊に軍人の武功を賞するのに、金錢を以てすると云ふことは、要するに金を以て手柄を買ふ譯で、我が國古來の武道と、根本的に相容れぬと思ふね。夫に又場合に依つては、次の樣な奇現象を現はすことがあるよ。

貰はぬのが不名譽

勳功と官等

武道と相容れない

甲乙二人

例へば茲に甲乙二人の佐官があつて、甲は日清戰爭に於ける殊勳の爲め、功五級の金鵄勳章(年金三百圓)を授與せられ。乙は戰場に出なかつたが爲め、勳何等かの旭日章と年金八十兩を貰つたと假定し玉へ。然るに今度の戰爭では、甲乙共に同等の武勳を顯はしたるが爲め、戰後何れも金鵄勳章を頂戴するとせば、佐官の敍勳は四級以上の規定だから、甲乙共に功四級年金五百圓を授與せらるゝことになるだらう。

妙な現象

さうなると、以前に功五級を持つて居た甲は、四級に進級したるが爲め、五級に對する年金三百兩は自然に消滅して、新に四級に對する五百圓丈を貰ふことゝなるんだ。乃ち今回の戰功に依つて、以前よりも增す金額は、500−300=200で、僅に二百兩丈しか無い。然るに以前に旭日章と八十兩の年金とを貰つて居た乙は、新に功四級に敍せられたるが爲め、今回の戰功に依つて得る處の年金五百兩は丸貰ひぢや。お負けに、前の旭日章に對する年金は依然として有效

甲は增す處僅に二百兩

乙は得る處五百八十兩

なのだから、つまり500+80=580で、今後五百八十兩の年金が貰へる譯ぢやないか。して見ると、今度の戰爭に於ては、甲も乙も全く同じ手柄を立てゝ居ながら、甲に對する御褒美は五百兩と云ふ頗る不公平な結果を生ずるのだ。夫ばかりでなく、以前は甲の方が乙よりも二百二十圓(300−80=220)丈け、多額の年金を貰つて居たものが、今度の戰爭の結果、乙の方が甲よりも却つて八十兩丈け、餘計の年金を戴く樣になるのだ。

不公平なる結果

要するに、甲と乙とは今度の戰ひに同じ勳功を樹てながら、甲は日清戰爭に於て殊勳を樹て、金鵄勳章を戴いたが爲め、殊勳でなかつた乙よりも、却つて年金が減つた譯さ。凡そ世の中に此の位理窟に合はない、馬鹿〳〵しい事はあるまいぢやないか。政府にも大分理窟屋が多い筈だが、斯んな見え透つた事がわからないんだらうか。現今の組織では論功行賞後、或は砂上隅語が起らぬとも限らないよ。』

此の位不合理なことはない

砂上の偶語

一切平等

一度も三度も同じこと

官等標準よりも勳績標準

K『成る程、そう云へばそうぢや。こいつは平素の貴樣にも似合はぬ警拔な着眼ぢや、褒めて置いて遣はすぞや、ハ、、、。そこでオレの持論は金鵄勳章の如き武勳章は、上大將より下一卒に至るまで一率平等とし、現在の進級法を止めて、重授法と改めるんだ。乃ち金鵄勳章は二つでも三つでも、重ねて授與することが出來る樣にするんだ。そうでなくば實際の武功を表奬することは出來ない。例へば現在の制度では、將官で唯一度戰爭に參加し、殊功を立てたる者も功三級だし、尉官で一度、佐官で一度、將官で一度と、都合三回の戰爭に從ひ、毎時も殊功を顯はしたる者も、同じく功三級ぢやないか。斯くては軍功の名譽を以て生命とすべき軍人を奬勵するの途に反いて居る譯ぢや。次に又、金鵄勳章に强ゐて年金を付ける必要があるなら、之も官等標準制度を廢して、勳績標準制度に改めるんだね。尙ほ一つには、武功拔群者に對しては、外國の如く、勳章卽授の法を採用するのだ。

日本の軍人ぢやないか

張り飛ばすぞ

道理に二つはない

どうだ、名說だらうが！。贊成しないか？』

F『贊成も糞もあるものかい。貴樣達や元來日本の軍人ぢやないか。陛下から賜はる勳章に對して、兎や角言ふ如きは實に不忠不臣の至りだ。殊に年金がどうの、こうのと云ふに至つては、精神の墮劣なること寧ろ唾棄すべきものだ。一體我々軍人は勳章の大小や年金の多寡などに依つて、御奉公するのぢやないぢやないか。愚圖〳〵言うと張り飛ばすぞ。……』

K『ハ、、、おつかないね！。貴樣の石頭にも毎度ながら呆れるよ。曹達でも雜ぜて三晝夜もトロ火で煮詰めて見い！。ちつとは軟かくなるから……。一體軍人だつて、正理の言論を爲すのに何の遠慮が要るものかい。天下の道理に二つは無いのだ。貴樣等が軍人を以て、自ら啞と同樣に心得、俗衆の愚論を御無理御尤もで聞ゐて居るから、世間の奴等が增長して馬鹿にするんだい！。立憲國の軍人は今少

し自己なるものを意識しなくちや駄目だ。』

H『又六かしい屁理窟を捏ねて居るな。君等二人はまるで犬と猿との様に、顔さへ見りや喧嘩をせずに、ちゝと天下國家でも論ぜんかい。……第一今から動章の心配をするなんて、あんまり氣が早すぎるよ。朝鮮海峽の夜廻りぢや、迚も金鵄勳章になる氣遣ひはないから安心せい。まア精々お負けをした處で、金米糖(瑞寶章)に頓服(一時賜金)三百兩位が關の山だね。餘り欲張つた野心を起すと、越中式に向ふから外れるぞ。今迄の處で、金鵄に價するものは、先づ驅逐隊と閉塞隊位なものかね。閉塞隊も實功は少かつた様だが、意氣の壯烈を買つてやるさ。』

T『閉塞隊も、も少し死ぬるかと思つたら、案外怪俄が尠くて好かつたね。ところで、○○のY中尉は今度愈々閉塞隊に選拔されたと言ふぢやないか。』

夜廻はりぢやだめ

意氣の壯烈を買つてやる

F『そうか？　そいつは甘くやつたなア。當年のあばれ者、今日の軍神か、ハ、、、』

K『閉塞もも、う是で三度目だから、今度はきつと成功するだらうね。夫に今度は餘程計畫が大きい様ぢやないか。』

M『併し惜しい事には、閉塞船がどれもこれも、古船ばかりだからね。○○丸なんか、昨日試運轉をやつて見たら、機械が惡いので機關長が泣いて居たぜ。』

F『そいつは心細いね。併し新らしい船を使へば、陸軍の輸送に支へるし、……一そ、今井艦長の説に從うて「鎮遠」をぶち込めば宜ゝのに。』

T『閉塞と同時に、第二軍の上陸もやると云ふぢやないか。』

K『そんな話しだね、そこで我々の隊は閉塞掩護か、第二軍上陸掩護か、どちらかへ使はれるんだといふことだぜ。』

F『そうか？　そいつは愉快だ！　願はくは、閉塞掩護の方へ行きたい

今度はきつと

古船ばかり

鎮遠をぶち込めば

そいつは愉快だ

ものだね。』

やがて四月の三十日、東郷長官から作戰命令が配付せられた。其の要領に曰く、

聯合艦隊は第二軍と協同して海陸連合大作戰を開始する。聯合艦隊主力は五月一日閉塞隊を護衞して根據地を發し、旅順方面の敵に對して作戰する。第二軍は五月三日分遣艦隊掩護の下に集合地を發し、鹽太澳豫定地點に上陸を決行する。

と、而して自分等の艇隊は閉塞隊掩護並に隊員收容の任務を命ぜられた。

暮色悽愴

決死の將卒二百四十四名

萬死に一生なし

第一回第二回の閉塞船

九　閉塞隊

作戰の計畫既に定まり、我が聯合艦隊の主力は五月一日午後五時を期し、大擧して旅順に向ひ發動することゝなつた。此の日一天晴れ渡つて空に片雲を見ず、駘蕩たる輕風は漣波を漂はし、老春の陽氣怡和として、殺伐なる兵を動かすには、聊か不調和な天候であつた。

自ら進んで國家の犧牲たらんとする總指揮官林海軍中佐(三子雄)以下、將校下士卒二百四十四名の閉塞隊員は、熱烈なる萬歲の聲に送られつゝ、前日既に其の本艦を辭して、各自部署せられたる閉塞船に乘り移つた。抑も敵港閉塞の何たるやは、今更めて說明を要するまでもなく。正に是れ赤手龍淵に投じ、空拳虎穴を襲ふの類で、其の隊員は萬死に一生を期することの出來ないものである。開戰以來我が艦隊は已に兩回旅順港口の閉塞を試みた。卽ち第一回は二月下旬「天津」、「仁川」、「報

奏功尚ほ未だ完全ならず

物好や彌次馬では出來ない

陸軍の情況

國」、「武陽」、「武州」の五隻を以て、第二回は三月下旬「千代」、「福井」、「彌彦」、「米山」の四隻を以て、何れも有馬海軍中佐(良橘)總指揮の下に、極めて勇敢壯烈に決行せられたが、不幸にして未だ完全に其の效を奏せず、港口は尚ほ依然として敵艦の出入に開放せられて居る。併し乍ら兩回とも、其の事業の困難なるに比し、幸に人員の損害は極めて輕微にして戰死者は兩回を通じ、僅に數名に過ぎなかつた。左れば世人は動もすれば閉塞事業を輕視する虞もあるが、何しろ抵抗力皆無の商船を以て、防備嚴重なる敵の港口に突入するのであるから、物好や彌次馬では迚も出來る仕事ではない。東京の人がよくやる交番燒打や、新聞社襲撃とは大に趣が違うのである。

當時我が陸軍の狀況は如何と顧みれば、黑木大將の率ゐる第一軍は、將に鴨綠江を渡つて滿洲に攻め入らんとし、奧大將の率ゐる第二軍も亦既に朝鮮大同江に集合して、遼東沿岸に上陸決行の機を待つて居る。

最善至良の策

林子平にあらねども

然るに第二軍の上陸豫定地點たる鹽太澳は、旅順口を距つること僅に數十海里に過ぎないので、動もすれば敵艦隊の襲撃を受くる虞がある。故に奧軍の上陸をして絕體に安全ならしむるには、旅順港口を閉塞して敵艦隊をば、其の港內に封じ込むのが最良至善の策である。是に於て我が艦隊は前二回に比し、更に大規模の計畫と準備とを以て、必成を期し、爰に第三回閉塞を企てられた次第である。

實彈を送る敵に向つて進むは、自分に於ては臍の緖切つて以來、今度が始めてゞある。若し武運拙くば一發の敵彈に碎かれるかも圖られない。兩三日以來下士卒の出す軍事郵便には、大分遺言的のものが多い。併しながら林子平にあらねど、天下に父母なく、兄弟なく、妻子もなく、財產もなく、生きて扶養の責もなければ、死して後顧の患ひもなく、戶籍簿の一枚をば己れ唯一人にて獨占する自分は、人間並の遺言書など殘す必要も認めず、唯少しばかり人に見られて恥かしき、手紙と寫眞の

破ぶるに斷腸の思ひ

あつたのをば、せめて出陣の言譯までに處分した。中には是ばかりは
と、破ぶるに斷腸の思がしたのもある。

猛虎の息繕ひ

さしも往復頻繁なりし各艦の汽艇端舟も、正午過ぎには總て艦内に
收められ、數十隻の艦艇より吐き出す煤烟の色は次第に濃くなつた。
汽笛の響も今は最と稀に、港内誠に森として居る。然し夫は決して死
の靜けさでもなければ、夜の寂しさでもなく、恰かも猛虎の將に搏たん
とする前に於ける忍繕ひの如く、靜寂の裡にも自ら凄殺の氣が磅礴
として居る。大砲も水雷も準備された。出港の用意も整うた。今は
唯發動の令を待つばかりである。

發動

やがて豫定の午後五時を報ずるや、旗艦の檣頭高く『直に出港せよ』
の信號が掲げられた。轟轟たる「ウインチ」の響と共に、各艦艇は順
次に錨を捲ゐて港外に出て、直に豫定の航行陣形を制つた。「第三戰隊」
先鋒を承はり、出羽少將其の司令官として「千歳」を旗艦とし、「吉野」、

船行陣形

艦艇合して六十隻

「高砂」「笠置」、「淺間」、「八雲」の諸艦之に屬して居る。「第一戰隊」踵い
で進んだ。東郷聯合艦隊司令長官は將旗を「三笠」に掲げ「初瀬」「朝日」、
「敷島」、「富士」、「八島」の六大戰艦を直率し、梨羽少將司令官として之に
隷した。「第二」、「第三」、「第四」、「第五」の四驅逐隊其の右翼を護り、閉塞船
隊は更に「第一戰隊」の後方に從うた。總指揮官林中佐は「新發田丸」
に搭乘して先頭に占位し、「小倉丸」、「朝顔丸」、「三河丸」、「遠江丸」、「釜山
丸」、「江戸丸」、「長門丸」、「小樽丸」、「佐倉丸」、「相摸丸」、「愛國丸」の十一隻順
次之に次ぎ、砲艦「赤城」、「鳥海」其の左翼を掩護し、「第九」、「第十」、「第十四」、
「第十六」の四個艇隊其の右翼を警衛し、通報艦「龍田」は列外に在つて通
信傳令に從事して居る。艦艇合して六十隻、陣形蜿蜒として恰かも長
蛇の黄海を捲くが如く、前艦既に霞に入つて後艇尚ほ未だ水平を出で
ず、黒烟天を焦し、艦旗波に閃き、凜々たる軍容、堂々たる陣形、意氣軒然と
して乾坤を呑むの概があつた。時に夕陽既に西天に低く、暮雲錦を染め

めて波燃ゆるが如く、風和かに海靜かに、韓山高低紫烟濃やかである。

此の夜黃海風死して一面磨するが如く、舷に激漣の咽きもなければ、檣に蕭颯の響も聞かず、十八日の月朧に懸つて、前艦後船、影眠るが如くである。正子當直を代つて室に降れば、一睡する暇もなく、濃霧襲來の報に接した。眠き眼を摩りつゝ上甲板に出で見れば、天海溟濛として、唯僅に前艇の燈光霧に咽んで、明滅するを見るのみである。數十隻の艦艇が互に衝突を警むる汽笛の聲は、或は遠く猛虎の嘯くが如く、或は近く屠牛の啼くが如く、哀れに又物凄く、暗き夜半の寂寞を破つて居る。蓋し閉塞行動には誠に絶好の天候である。晏天若し靈あらば、願くは明夜も亦今夜の如くあらしめんことを祈つた。

明くれば五月二日である。一陣の曉風颯として到れば、濛氣忽ち四散して朝暾紅旣に闌に、眼に映ずるもの一艇亦一艦。平靜眠れるが如き黃海は再び、艨艟快艇、檣を連ね、黑烟龍驤天に漲るの活氣を呈し、

旭光耀々、好風颯々、身心頓に清爽たるを覺えた。

已にして午前七時頃に至るや、北西の勁風俄かに起ると見る間に、今迄細波漣々として池の如くなりし海面は、倏忽として白波奔騰、狂瀾怒號の荒海と變じた。怒濤舷を打ては、白濤潑溂として甲板に漲り、船體動搖して殆んど坐立に堪へない。速力遲緩なる閉塞船の如きは、隊伍の保持困難にして、或は進み、或は後れ、陣形漸く亂れんとした。幸に正午頃に至り風は次第に衰へしも、餘波尙ほ搖蕩として航行頗る困難を極め、閉塞船隊は隊列益々混亂して、一二のものは遠く後方に落伍するに至つた。是に於て艦隊は暫く速力を緩めて陣列を整へ、午後三時再び航進を起した。

此處は旣に黃海の眞中、何れを見ても波亦波で、往き來の船の帆影も見えねば、飛び交ふ鳥の翼も稀である。船は今旅順を指して直進して居る。汽機は轉々として寸時を休まず、歩一歩敵地に近づきつゝある。

感慨坐ろに切

光譽大なる死刑の宣言

閉塞隊の突入は今夜十二時の豫定である。今より八時間の後、吾人の運命は果して如何であらう？。敵彈に碎けて砲車に駕するか、將た無事任務を遂行して明日の日出を拜するか、豫て覺悟の身にも坐に感慨の切なるものがあつた。

うねりも次第に收まつて、陽は何時しか西海に沈んだ。午後七時閉塞船隊は茲に「第一」、「第三戰隊」と最後の別れを告げた。各艦は登舷の禮を行ひ、萬歲を三唱した。樂隊は『進軍』の曲を奏して行を壯にし、『ロングサイン』を謳つて別れを惜んだ。旗艦の檣頭には『豫め成功を祝す』との信號が掲げられた。是ぞ閉塞隊員に對する光譽大なる死刑の宣告である。雲は水平に低く、波は黎味を帶びて、暮色轉た凄愴を極めて居る。

斯くて驅逐隊、艇隊並に「赤城」、「鳥海」は艦隊と離れ、塞閉船隊を警護して豫定の部署に就いた。進み行く閉塞船。歸り去る艦隊。無心の

旅順の探海燈見ゆ

實盛の意氣重成の雅懷

疲牛の歩み

煙も永く東西に相結びて、惜別の情あるものゝ如く、空は曇つて風生ぬるく軍樂の奏曲波に消ゆれば、艦隊の影は最早見えない。疲れし體をしばし休めんものと、室に降りて横たはれば、當直の水兵早くも來つて、旅順の探照燈見ゆと告げた。時正に午後九時三十分である。

生來茲に三十年、初めて敵彈の下に立たんとす、昔は齋藤實盛鬚髮を染て陣に臨み、七百年後の今日、尙ほ人をして此の老武者の意氣を偲ばしめ、木村重成は戰死の冑に香を燒き込め、袖の薫を三百歲の後に留む。我に實盛の意氣、重成の雅懷なくとも、せめては日本武士の嗜みと、褌取り代へ、衣服を更め、午後十時出でゝ司令塔上に立つた。

暗雲空に蔓つて星影いと稀に、寒波舷を嚙んで燐光獨り青く、風蕭々夜氣沈々！。前方を眺むれば敵の探照燈は恰かも青龍の焰を吐くが如く、紫青の光鋩時々海面に閃いて居る。側方を顧みれば二三の閉塞船は疲牛の歩みいと遲く、影も朧に屠所に向つて喘いで居る。十時

死地は近づけり

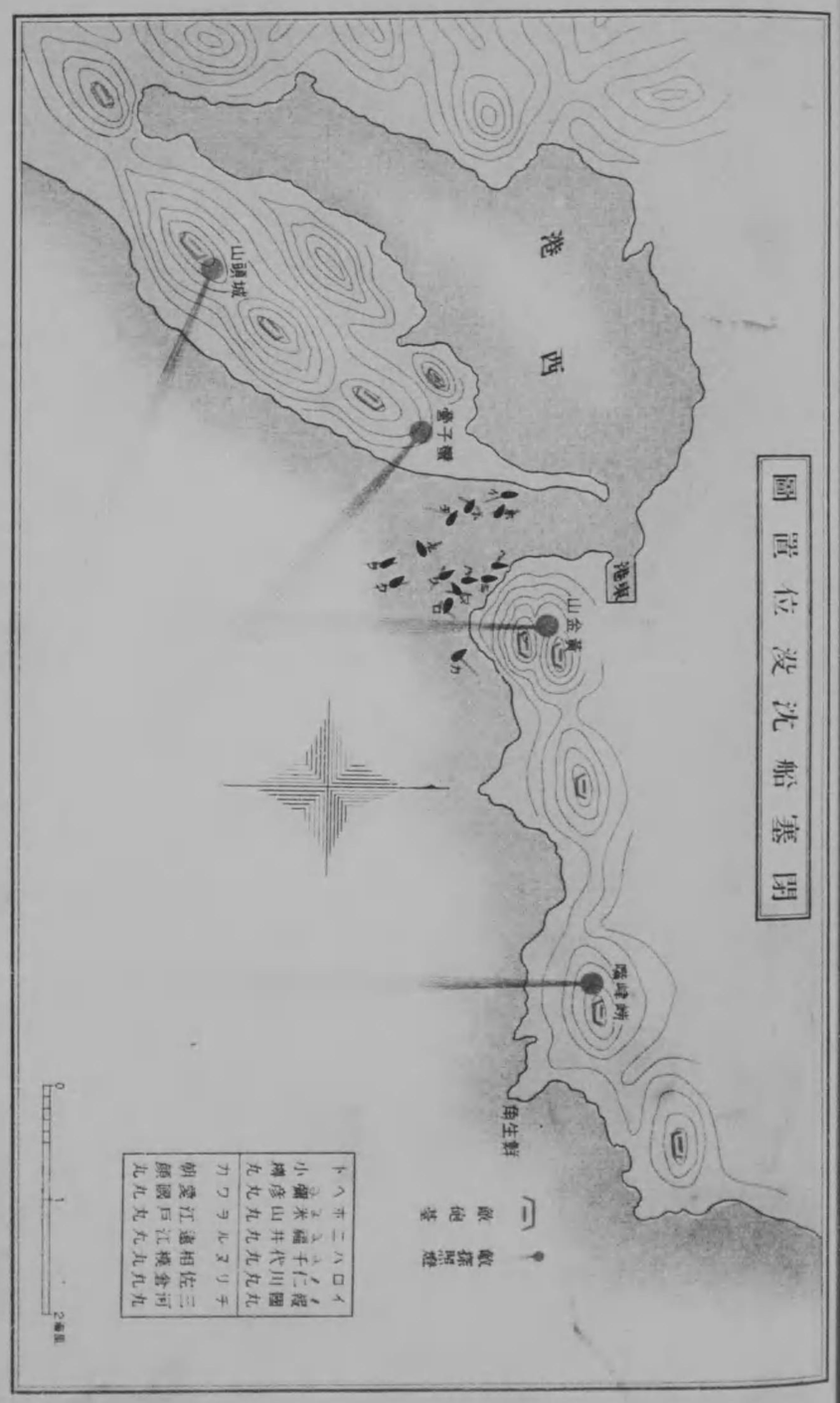
勇士の心緒今果して？

海は烏羽玉の暗

三十分月初て東海に上つた。濛氣水平を罩て月光曈々く火よりも紅い。

死地は近づけり、虎穴は眼前に迫つた。敵探照燈は次第に其の數を增して二基、三基、四基となつた。其の左に高きは城頭山、右に高きは嶗嶗嘴、中央右なるは黃金山、左なるは蠻子營の探照燈である。而して中央二燈の中間こそ、二百有餘の我が將卒が、將に其の屍を埋めんとする旅順の港口である。先には茫として焰の如く見えし探照燈光は、今や煌々く魔鏡の如く、右に左に旋轉して、苟くも旅順の門戸を窺はんとするものは、寸塵片埃、尙ほ且つ漏らさゞらんと力めて居る。孱弱なる商船を驅つて、赤手空拳、此の死地に乘り入らんとする、閉塞隊勇士の心緒今果して如何？

各艦艇は今や其の一切の燈火を滅した。存するものは唯僅かに船尾を照す一穗の微光のみである。月は雲間に隱れて海は烏羽玉の闇となり、昨日以來常に左舷に並進し來りたる閉塞船も、今は復た見る能



暴風俄かに起る

今は我身が決死隊

敵か味方か

はざるに至つた。船は益々進んで旅順は既に十餘海里の彼方に近づいた。夜は次第に更けて時は正に十一時を報じた。先程より吹き起りたる東南の風は、何事ぞ、此の時急激に其の力を增して遂に暴風となつた。空には暗澹たる怪雲飛鳥よりも速く、海には澎湃たる激浪奔馬の如く、小さき艇隊は輾轉動搖、波に漂ふ木の葉も啻ならず、瀧なす飛沫は絶間なく頭上より降り懸つて、眼を開くことさへ出來ない。外套も、上衣も、襦袢も、忽ちにして潮に浸され、總員唯柱を抱き、索を握つて、僅かに身を支ふるばかり、顚覆沈沒を覺悟して、今は我が身が決死隊である。

嗚呼天何の恨む處あつてか今にして此の暴威を振ふ？。

地利、人和も天の時を失へば成功期し難しとか、今や風浪逆に怒つて我に利あらず、自分は心竊に今夜の行動の中止せられんことを希ふた。偶々沖合に方り、敵か味方か、頻りに發光信號を爲して居るものがある。尋で二三の閉塞船の反航するが如きを見た。信號を讀まんと

行動中止の命令

牛輪の月

四分五裂

力めしも、烈しき艇の動搖と、絶間なき飛沫とに妨げられて果さず、曖昧の間に行き過ぎた。後に聞けば、是ぞ林總指揮官が閉塞隊に降したる、行動中止の命令信號であつたと云ふ事である。正子頃我等の艇隊は進んで遂に旅順口外に達した。風は益々吹き募り、檣も煙突も、吹き倒されんばかりの勢である。波は愈々荒れ狂ひ、人も艇も、唯一呑みとばかりに打ち寄せて來る。山の如き激浪は強烈なる電光を浴びて、白銀の雪と輝き、岸を打つ怒濤の響きは、峰に激する狂風の聲と和して、轟々轟々、雷鳴を發して居る。時々、斷雲が吐き出す半輪の月は、黑暗々たる物凄き老鐵山の影をば半天に描出し、絶えず旋轉する探照燈は恰も巨蟒の眼の如く、紫青の電光、山より斜に暗空を貫いて居る。凄慘たる光景實に筆舌の能く盡す所でない。閉塞船も、掩護艦艇も、四分五裂して今は何處に行きしやら、杳として其所在さへ知れない。然も陸上幾多の敵砲臺は、臥榻を窺ふ仇あるを知らぬ氣に、尙ほ聞として未だ眠り

波濤益々險惡

ゴロ〳〵ガラ〳〵

より覺めない。

是に於て我等の艇隊は、暫く形勢を窺はんが爲め、速力を緩めて旅順口外を漂航した。沖合より吹き來る風は、陸岸に近づくに從ひ、波浪益々險惡である。艇の動搖は殆んど其の極に達し、浪は絶えず上甲板を越えて艇內に打ち込んで居る。怒濤の船底を敲く響きは、宛ら暗礁にでも乘り揚げたかの如く、船體激震して體は甲板より彈き上げられ、船は撓んで今にも眞二つに折れるかと疑はれる。推進機の空轉する振動は、體中の關節をば悉くもぎ取るかの如く、機關は碎けて船鈑の接目も斷裂するかと思はれる。殊に横波を受たける時の如きは、艇の傾斜は六十度を越え、甲板垂直となつて、檣頭波を掬はんばかり、顚覆せぬのが寧ろ不思議な位である。器物の轉落破壞する音は、ゴロ〳〵ガラ〳〵、茶碗碎け、皿壞れ、バケツ上甲板に驅つて、飯櫃下甲板に躍るも、全く手の付け樣がない。人は唯双手に鐵柱を握り締め、兩足を大の字に踏

綱引をやつた後の樣

鹽辛いやつながぶり

み開きて、恰も遊動木に乘りたるが如く、艇の動搖に連れて僅かに身體の釣合を取るばかりである。しかも一度調子を失へば忽ち足を拂はれて、デッキの上に横倒しに投げ付けられる。此の時若し誤つて手を離せば、身體は艇外に拋り出されて、怒濤の餌食とならねばならぬのである。されば一時間も經たぬ間に、手は恰も綱引をやつた後の如く、全く感覺を失うて、指の屈伸さへ不自由となり、膝は硬直して屈めることも出來なくなる。五月とは云へ、旅順の海はまだ中々寒い。一波浴びる毎に、襦袢まで浸み込む潮水の冷たさ、氣持惡さ、實に何とも言へない。ピシ〳〵と砂を投げ付る樣な波の沫は、絶えず面を打つて、顏は腫れ上り、眼は充血して朱を注した樣になる。また其の上に息を吸にも、波の合間を計つてやらねばならぬ。否らざれば苦い鹽辛いやつを、がぶりと飲まされる。息も碌々出來ぬとは眞に此の事である。左れば水雷艇乘の爲めには、風こそ親の仇よりも尙ほ憎いのである。

閉塞船はまだ見えない

射擊の目標は何？

十　閉塞隊（下）

狂風と爭ひ、激浪と戰ひつゝ、旅順口外を漂遊せる間に、時刻は進んで五月三日の午前二時となつたが、閉塞船は未だ姿を現はさない。或は行動中止となつたのかも知れぬ。若し然りとすれば、何等の目的もなきに、此の儘朝までかぶられては溜つたものでない。一そ何れにか避難した方が、得策であらうなどゝ考へて居るうち、突然黃金山砲臺から發砲した。血よりも赤き一發の火光、鋭く暗中に閃めくと同時に、轟然たる砲聲山海にどよめいた。附近の海岸砲臺から五發、六發、七發……續け樣に打ち出した。扨は愈々閉塞船の闖入？と、速力を增して直ちに豫定の受持哨區に就いた。眸を定めて港口を眺むれども、其ぞと思ふ船も見えねば、彈丸の行衞も判らない。射擊の目標は何であらう？。砲擊は益々急に、砲聲は愈々烈しい。暗黑の海岸は眞紅の砲火に飾ら

水雷艇の港口偵察

仰げば六萬燭力の大探照燈

れ、探照燈の旋轉は一層敏活となつた。艇の動搖も、手足の痛みも、今は全く打ち忘れ、しばし茫然として此の壯烈なる光景に見惚れるうち、港口に方り二三の水雷艇らしきもの、電光を潜つて縱横に馳突せるを發見した。中にも一隻の水雷艇は敵彈に傷きたるものか、燻に蒸氣を噴出しつゝ、敵探照の下に猛擊せられて居る。是れ閉塞隊前衞の任務を有せる第十四艇隊が、港口偵察を行うたのであつた。

斯くて砲擊約十分ばかりにして、水雷艇は何れも探照界を退きたるものゝ如く、其の姿を闇に沒すると共に、敵の砲火も亦收まつた。前衞隊既に來る！、閉塞隊の來る最早や間もあるまじと、我等の艇隊は圓陣を畫きつゝ哨區の警戒を續けた。抑も自分等の受持哨區は、嶮崖嘴の南方、距岸約二海里の處である。仰げば六萬燭力の大探照燈は、爛々たる毒焰を海面に放ち、時々我等を照映してをる。一たび照らさるればる新聞の字は素より針の穴さへ見える。探照燈の周圍には幾多の敵砲

今度は打つか、今度は中るか

失頭第一「三河丸」

臺がある。暗にそれとは見えねども、砲は彈丸を含んで、恐らく我等を狙つて居るであらう。發砲の電流一たび通ずれば、艇も人も唯一發の彈丸に粉碎せられるのである。探照燈の旋り來りて我等を照らす毎に、今度は打つか、今度は中るかと、默つて待つて居る心の中は、彈雨を冒して突擊するよりも尙ほ遣る瀨ない。

風は少しも其の力を緩めず、敵の警戒は益々嚴となつた。中央二基の探海燈は、港口を挾んで十字照線を作り、左右の二基は旋動して頻りに餌を探つて居る。時は、進んで午前の二時三十分。一隻の閉塞船は今しも忽焉として、敵探照界の內に現はれた。是ぞ匝瑳海軍大尉（胤次）の指揮せる「三河丸」である。同船は林總指揮官よりの、行動中止の命令を知らず、我が偵察隊に對する敵の砲擊を見て僚船の突入と信じ、單船孤行、程を急いでやつて來たのである。

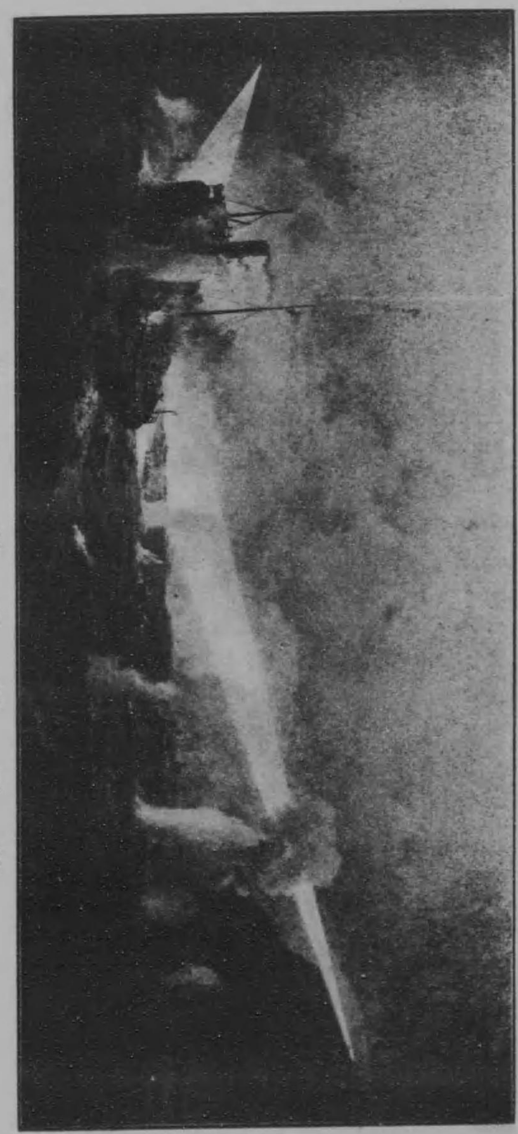
城頭山砲臺先づ砲火を開いて之を邀へ、饅頭山、蠻子營、威遠、黃金山、夾

板嘴、嶗崖嘴等の永久砲臺を始めとし、港口兩岸に布列せる大小幾多の臨時砲臺之に和し、我が「三河丸」目懸けて一齊に砲擊を開始した。般々たる砲聲は百雷の一下するが如く、山は碎け、海は覆へらんばかりに凄じく、狂風も、怒濤も、爲めに其の聲を奪はれ、紅を溶きたる如き眞紅の砲火は、點々として高く、低く、暗中に閃き、紫電紅焰、相映射する狀、壯絶又凄絶の極みである。

閉塞船は如何にと顧みれば、其の痩せたる煙突よりは吐き切れぬばかりの、ドス黑き煤煙をば强風に靡かせつゝ、降り布く飛彈を物ともせず、港口指して一直線に突進して居る。城頭山探照燈は船の眞横を照らして寸時も離れず、墨繪の如き船影は青白き電光の裡に、物凄く畫き出されて居る。煙突は細く、檣は小さく、加ふるに速力遲々として、船首に波も得揚げぬ風情は、屠所の羊のそれならなくに、一しほ哀れに見える。船の周圍には大小の彈丸落下して、水煙沸々、銀柱林立、時に全く

山碎け海覆へる

屠所の羊



生きた人間は居るまい

新たなる餌食

雨よりも繁く霰よりも密

船影を蔽ふこともある。其の砲撃の狂猛激烈なること、最早や船内には生きた人間は、恐らく一人もあるまいと迄思はれた。然し船は尙ほ依然として前進を續け、遂に港口附近に達した。

此の時又二三隻の閉塞船は一團となつて、敵探照界の内に現はれた。敵砲火の大部分は今や此の新たなる餌食に向つて移された。先に港口に進みたる「三河丸」は、今正に爆沈を果たしむるものゝ如く、合圖の火箭高く中空に輝くを見た。踵いで二三の閉塞船は、斷續として更に又港外に現はれた。敵の射撃は愈々益々急である。大は二十八珊の榴彈砲より、小は二听三听の輕砲に至るまで、幾百門の砲口より吐き散らす大小の砲彈は實に、雨よりも繁く、霰よりも密に、船舷に碎けては紅焰迸發、波に閃き、海面を打つては水柱三丈、電光に輝く。砲聲は轟々として天、海にどよめき渡り、耳は聾して、身は恰も大鼓の中に封じ込められたるが如く、砲火は閃々として暗空に瞬たき、滿庭の紅花咲いては散

り、散りては又開くに異ならず。正に是れ滿山のイルミネーションである。中にも最も壯烈なるは敵水雷の爆發にして、海水逆立、天に冲し、紫電之に映じては白銀の巨木、萬朶の珠玉を結ぶ、兩國橋畔の川開など到底比べ物になつたものでない。

兩國川開きの比にあらず

昔時秀吉征韓の役、鍋島勝成歎じて曰く、『我れ曾て吉野の花を見て蓋し天下の絶美と爲す、然も今日海戰の壯を見るに及んで、吉野の花遠く及ばず』と、凡そ天下如何なる美も、壯も、海の夜戰に如くものはあるまい。

吉野の花遠く及ばず

指折り數ふれば此の時探照燈に照らされ居る我が閉塞船は其の數總て六隻。前なるは既に港口に近く、後なるは猶ほ城頭山下に在り。四基の探照燈は交々之を照らして、海面明らかなること白晝を欺き、各船の狀況歷々として見ることが出來る。檣の折れたるもの、煙突の碎けたるもの、白煙を噴出せるもの、船體既に半ば沈沒せるものなど、苦戰

苦戰

の程も思ひやられる。將卒の死傷も定めし尠くないであらう。折しも四番目に進みたる一船、既に港口に近づきたる際、遽に猛烈なる水煙に包まれたと見る間に、忽焉として其の姿を水面より沒した。是れ犬塚海軍大尉（太郎）の指揮せる「愛國丸」が敵水雷の爆發に罹つたのである。斯くて殘り五隻の閉塞船は、獰猛激烈なる敵彈を冒して悉く港口に達し、相前後して何れも爆沈の火箭を揚げた。時正に午前三時半である。轟々天地を震はす巨砲の響は稍や衰へて、戛々耳を劈く機砲小銃の音は漸く熾となつた。敵は今や我が閉塞隊員の歸途を扼せるのであらう。左右二基の探照燈は再び旋轉し始めて、尙ほも好餌を索めてをる。牽制の任務を有せる我等は、敵に對し小砲を放つて、微弱なる抵抗を試みた。敵は猪口才なと言はぬばかりに、探照燈を差し向くると共に、激烈なる答擊を開始した。大小の砲彈、或は頭上を飛過し、或は舷側を掠め、艇周に落下するもの連續數十發。大なるはブーンと呻

水雷に惱れる「愛國丸」

何を猪口才

鳴り、小なるはピューンと響く、幸に命中を免れしも、其の彈着中々悔り難いものがある。

折しも鮮生角方面に方り、一隻の閉塞船は突如として、嶮嶮嘴の探照界に現はれた。其の船首の形狀に依つて直に、向海軍大尉(菊太郎)の指揮せる「朝顔丸」なることが知られた。群を離れし濱千鳥の友を追ふが如く、單船捷路を執つて港口に向ひ驀進して居る。纔に緩まんとせし砲聲は再び激烈となり、敵は殆んど其の全砲火をば此の一船に對して集中した。「朝顔丸」は我艇隊と陸岸との中間をば、眞一文字に突過したので、我が隊との距離は僅かに一海里に過ぎない。船體に命中する敵彈は手に取る樣に見える。中る！。中る!!。忽ちの間に舷側に爆裂したるもの十餘發を算へた。殘酷！。無情！。殆んど見て居られない。全身の血は煮へくり返つて、獨り腕を扼し、齒を切するも、如何ともする事が出來ない。見れば船の後部は已に半ば沈んで、速力は著

「朝顔丸」の單船突入

殘酷！無情！

しく減じて居る。而も煙突よりは黑い〳〵煙を吐いて、尙ほも死地に向つて急ぐ有樣、乘員は是れ人か神か、實に日本魂の精である。敵は少しも砲擊の手を緩めず、流彈は頻りに我等の附近まで飛んで來る。

斯くて「朝顔丸」は遂に港口に達するを得ずして、黃金山の南方斷崖下に沈沒した。時凡そ午前の四時乘員は恐らく全滅したであらう。

「朝顔丸」既に沈沒し、最早や後に續くものも見えない。今や我等收容隊の任務を盡すべき時期が來た。風は稍や衰へしと雖も、波は尙ほ荒れ狂ひ、山の如き奔浪は澎湃として、港口に向ひ打ち込んで居る。百餘噸の水雷艇ですら、轉覆せんばかりの此の荒海に、如何で木の葉に等しき端舟を漕いで、沖合に出て來ることが出來よう？。最初の閉塞船「三河丸」が爆沈してより、早や一時間以上を經過するも、未だ一隻のボートさへ歸つて來ない。港口附近に於ける敵の砲擊は尙ほ盛んである。爆竹の如きけたゝましき機關砲の響は刻々劇烈となつて來た。

日本魂の精

我等の時は來た

恐らく一人の生還者もあるまい

此の響こそ既に任務を果して歸り來らんとする、我が忠勇の將士を殺す音かと思へば、腸を掻き裂かるゝ樣な思ひがする。此の有樣では閉塞隊員は恐らく一人の生還者もあるまいと信じた。偶々港口に方りてチラ〳〵と白いものが見える。岸に激する白波の光りとは稍や色が異つて居る。潮水に浸りし雙眼鏡をば拭ひ〳〵て熟視すれば、アナ無慚！。是ぞ二隻の端舟が敵探照の直下に在りて、猛擊を受けて居るのであつた。風浪前を遮り、敵彈後より迫り、身は傷き、舟は壞れ、百計茲に盡きて我が閉塞隊勇士は、今や敵の嬲り殺しに遭つて居るのである。

嬲殺し

此の慘狀を見たる瞬間、一種言ふべからざる敵愾の心と、惻憐の情とは、油然として心頭を衝き、「前進全速！」速力を早めて猛然港口に向ひ突進した。敵は忽ち我を照射して、猛烈なる砲火を開き、饅頭山あたりより發射する時限彈は、頻りに頭上に破裂して、彈片はバラ〳〵と

突進！

霰の如く降つて來る。暫く速力を緩めて敵の注意を避くるうち、前方に當り微かに軍歌の聲を聞いた。海は暗く、波は高し、加ふるに眼は、探照燈に曝され、飛沫に打たれて、視力甚だ衰へて居る。唯聲を便りに進み行けば、暴れ狂ふ激浪の間に、浮きつ沈みつ漕ぎ來る、一隻の小端舟を發見した。此の一瞬、陸に敵なく、海に波なく、胸中唯歡喜の一念あるのみである。艇員一同思はず萬歳を大呼した。「メガホーン」を取つて大聲『ボート！』と呼べば、聲や通じけん、軍歌は止んで、萬歳の聲は彼方より起つた。

『何番船？』

『四番船！』

自分は此の答を耳にすると同時に、更に一種の感は電の如くに胸底に閃めいて。

四番船！

陸に敵なく海に波なし

四番船！。「〇〇丸」!!。指揮官は確に〇〇大尉!!!。

皿瑳無事か

『〇〇無事か？』と、喉元まで出でし言葉をば、纔に唇に噛み殺し、無言の裡に端舟を見詰めた。問はぬは問ふに愈や優る、不幸の答を聞くを恐れてゝある。

收容の困難

漸く端舟に近づき行進を停むれば、艇は忽ち横波を受けて動搖愈々烈しく、艇、舟、交々相上下して、ボートのオールは篠よりも脆くべキ〳〵と折れる。若し一たび舷々相打たんか、よわき端舟は唯一擊に粉碎する恐れがある。加ふるに敵彈尙ほ頻りに飛び來り、閉塞隊員を艇內に收容するには、多大の危險と苦心とを重ねた。流石決死の勇士も張り詰めし氣の緩むと共に、連日の疲勞一時に發したるものゝ如く、水雷艇に移乘するや否や、死人の如く忽ち其の場に打ち倒れたものもあつた。先きには一人の生存者もあるまじと思はれた「三河丸」の乘員、總數十八名中、唯僅に一名の戰死者と一名の重傷者とを除く外、悉く無事生還したるを見ては、一層の歡喜を禁じ得ざると共に、又大に意外の

死傷僅に二名

感に堪へなかつた。

記念のボート

四番船の隊員は收容し盡した。先きに見えたる他の端舟を救はねばならぬ。再び汽機を前進するや、三重に取りたる舫索は、唯一擊の怒濤に斷たれて、あはれ勇士を救ひし名譽の端舟は、見る〳〵闇の裡に流れ去つた。記念の端舟素より惜しからざるにあらねど、今は徒らに空艇を追うべき時にあらず、『分隊長より戴いた刀を流して殘念だ』『水筒をボートへ殘して置いたに……』などゝ、閉塞隊員の繰り言を聞き流しつゝ、再び收容の任務に就いた。偶々後ろより、

擊は慥かに

『艇長！』

と呼ぶ者がある。聲は確に今も今とて念頭を離れざる〇〇大尉！。振り顧ると同時に、

『〇〇？』

互に手を握つて亦一語ない。暫くして、

『好くマア貴樣無事で歸つて來たね。』

最早や此の世で相見ることは出來まいと思ひし友の、其の身に微傷だも被らず、而かも偉功を遂げて今眼前に相見るに至つては、歡極つて發すべき詞をさへ知らない。唯心中彼が武運の目出度きをば、寧ろ怪しむばかりであつた。

寧ろ怪しむばかり

先に港口に在りたる端舟は如何にと眺むれば、敵彈に沈られたか、將た怒濤に呑まれたるか、今や一隻の影だに見えない。唯岸を嚙む濁浪の、獨り電光に輝くあるを見るのみである。嗚呼勇士の行衛や何處？

行衛や何處？

天地の終りかと迄怪しまれたる砲聲も次第に收つて、東天いつしか白を呈した。毒々しき探照燈の光も消えて、黃金山砲臺が薄靄の裡に現はれた。海面隈なく見渡せば、老鐵山の麓から鮮生角の沖合にかけ、三十餘隻の我が驅逐艦、水雷艇が激浪に搖られつゝ、點々として哨列を張つて居る。併し索ぬるボートは唯の一隻も見えない。港口を眺むれば水道は深く煙靄に塞され、港外には數多の閉塞船が、僅に檣や煙突の一部のみを水面上に露はし、坐ろに勇士の名殘を偲ばしめる。昨夜迄も行動を同じくしたる閉塞船は、今は既に貴とき犧牲となつて、旅順港外、海底深く沈んで仕舞つた。曾ては談笑起居を共にしたる戰友は、死生の程もまだ知られない。海岸の諸砲臺は左も誇り顏に、其の巨大なる砲口をば我等に差し向け、面憎きまでに澄まし返つて居る。昨夜別れたる我が艦隊は閉塞の結果を知らんが爲め、此の時再び其の雄大なる姿をば、迥かに東南の沖合に現はした。最早や尋ぬるボートも見えねば、退いて艦隊に合せんが爲め、艇首を旋らさんとする一刹那、城頭山砲臺より我々收容艇隊に對して、突然砲擊を開始した。距離は近し、照準は確かなり、打つたと思ふ、まもなく、二發、三發、四發、續け樣に艇側に飛んで來た。危險！危險！我が附近に在りし第九艇隊の一艇は、忽ち機關を擊たれて蒸氣噴騰、全艇白煙に包まるゝに至つた。

索ぬるボートは

勇士の名殘

面憎き砲臺

打つたッ